日本文化演習報告書　第3号

日本文化演習報告書

第3号

平成26年3月

北海学園大学人文学部日本文化学科

北海学園大学人文学部日本文化学科

2月24日

1. 京都市役所と京都ホテルオークラ
2. 三条大橋から鴨川上流を望む
3. 交流会（がんこ三条本店）

2月25日

4. 四条京町家の外観
5. 四条京町家での説明風景
6. 清水寺の前で記念撮影
7. 東山・祇園巡検講師の井上先生（平安女学院大学）と谷端さん・谷崎さん（立命館大学）
8. 清水の舞台
9. 東山・祇園巡検での移動
10. 講師の先生方による説明（高台寺公園）
11. 知恩院三門
12. 講師の先生方による説明（白川南通）
13. 湯豆腐に舌鼓（祇園円山かがり火）

2月26日

14. 紫宸殿＠京都御所
15. 諸大夫の間＠京都御所
16. 清涼殿＠京都御所
17. 延暦寺（東塔）入口
18. 延暦寺（東塔）境内
19 ～ 20.
　　祈り（根本中堂）
21. 鐘つき＠延暦寺
22.「源氏物語」横川僧都遺跡
23. 北野天満宮社殿
24. 北野天満宮の牛
25. 北野天満宮の梅
26. 祈り＠北野天満宮

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

３月１日

27. 最終プレゼンの準備
28 ～ 37.
　　最終プレゼン

38. 本学部 OB の武田さん（名鉄観光）
39. 菅先生による講評
40. 帰りの機内から

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

２０１３年度　日本文化演習　報告

引率教員代表　菅　泰雄

今年で 11 回目になる今年度は、学生 41 名、引率教員４名が参加し、ほかに旅行代理店の添乗員として本学科のＯＢである武田氏を含め、総勢 46 名による規模であった。

事前学習の第１回目として､10 月５日（土）のガイダンスでは､参加予定者の顔合わせと、自主研修日の調査目的を課題レポート 1 および課題レポート２として提出するための参考文献として、計 120 件あまりの文献リストが提示された。

課題レポート１の提出期限である 12 月初旬までに、各班ごとに学生たちは随時準備のための会合の機会を設け、全員レポートの提出を済ませることができた。

第２回目のガイダンスは１月 11 日に行われた。この日は、井野准教授による「比叡山と源氏物語」、船岡教授による「日本庭園と仏教　特に禅宗とのかかわり」、村中准教授による「京都の町の歩き方、地図と地名」、菅による「関西の言語景観」に関する講義が行われた。

研修初日は、１名の学生が夕刻現地で合流せざるを得ないハプニングが生じたものの、全員元気に研修をスタートさせた。

２日目、団体研修初日は、午前中は四条京町家の見学を行った。京の街に住む人々の暮らしぶりを体感することができた。午後は、立命館大学大学院の歴史地理学専攻の院生谷端郷さん、谷崎友紀さん、そして平安女学院大学の井上学先生の３人の指導・案内で清水寺を出発点とする「東山巡検」のフィールドワークを実施した。終了後、巡検の講師の先生方を囲んで夕食会を催した。

３日目、団体研修２日目は、午前は京都御所の参観、午後は比叡山、北野天満宮を訪れた。比叡山では根本中堂で有名な東塔だけではなく、西塔、源氏物語と深い関わりのある横川まで訪れることができた。

２日目、３日目は、春霞ならぬ中国から飛来したＰM2.5 の影響で京都の町はもやっていたが、その意味でも貴重な経験をした。

後半の２日間は、自主研修ということで、かねてからの入念な準備のもと、各班ごとに京都を中心に各地に出かけた。

最終日の午前は、各班ごとに研修報告のプレゼンテーションが行われた。これに備えて全日までの夜の時間帯は準備にいそしむ熱心な学生の姿が見られた。

学生達は１年次の基礎演習での経験を踏まえ、発表そして質疑応答を活発に行っていた。午後は関西空港に向かい、定刻に全員無事に新千歳空港に降り立ち、解散した。

なお、旅行中随時「人文学部フェイスブック」に写真を含めた情報を掲載した。

以下、最終レポートとして提出された 40 名分を掲載する。

目　次

●京都文学から見える、生活と自然との関係　阿部　光貴 …… 1
●京都の機能　阿部　萌花 …… 3
●京都研修を終えて～歴史・文化を学ぶ～　生田　未夢 …… 4
●京都で感じた歴史と文化　石井　詩朗 …… 6
●古典作品の中の自然と四季～小倉百人一首と源氏物語から～　石川　晴菜 …… 8
●関西研修旅行を終えて　板垣　有咲 ……10
●『源氏物語』の舞台、京都を訪れて～『源氏物語』と京都の関わり～　大野　友也 ……12
●京都っぽいもの　大類　悠 ……13
●京都の衣食住に見る「日本らしさ」　岸　香菜子 ……15
●京都文化のおもてなし　黒澤　絢華 ……17
●研修旅行を終えて得たもの　佐々木智香 ……19
●京都の歴史・食文化に触れて　田中　里佳 ……21
●親鸞ゆかりの地として見る京都　玉川　雄也 ……22
●京都の歴史的建造物の魅力　田村有里安 ……24
●京都に残る歴史的遺産から学んだこと　千田安佑子 ……26
●守られている日本の遺産　角田　愛理 ……28
●武士と京都～源平の戦いから鳥羽伏見の戦いまで～　中田　千晶 ……29
●文化や歴史に触れる京都での学習　西出　知弘 ……31
●京都とアニメの関係性　橋本　甲 ……33
●関西研修にて　林　瑛司 ……35
●現代における神社とその信仰　廣澤　佑紀 ……36
●古都　京都を歩く　藤島　小織 ……37
●幕末を生きた新撰組を知る旅　堀　真利香 ……39
●京都で体感した衣・食・住　松倉　優羽 ……41
●研修旅行を終えて　村中　光 ……44
●京都巡り～時代の変遷が見られる都～　森内　達也 ……46
●動乱の都～文化の都へ～　山田　遙希 ……48
●寺社仏閣と御神籤　石塚裕太郎 ……51
●日本文化演習を終えて　伊藤　淳雄 ……52
●研修報告レポート　岩佐　慶樹 ……54
●京都っぽい京都を巡る　坂口　大介 ……56
●古都を巡る～かつての都に見た良き“日本”～　下浦　康太 ……57
●京都の良さ、日本の魅力　成田　萌華 ……59
●茶道と幕末　野呂　千穂 ……60
●幕末風雲児と呼ばれた坂本龍馬から学ぶこと　畠山　稜子 ……62
●亀岡市内の方言における研修の結果と持論　半澤　圭介 ……63
●京都府亀岡市におけるセーフコミュニティー活動について
～セーフコミュニティーの概要・篠町川西地区の取り組み～　森　康平 ……65
●学んだことと得たもの　山名　楓 ……67
●京都への観光客からみた不満や利点　石塚　耕平 ……68
●日本文化演習を振り返って～寺社仏閣巡りの意義についての考察～　大宮　法明 ……70

京都文学から見える、生活と自然との関係

1部　日本文化学科
2年　2712103　阿部　光貴

団体研修では京都町屋や清水寺、比叡山などを見学した。自主研修では源氏物語ミュージアムや風俗博物館といった源氏物語にゆかりのある施設や、時雨殿といった百人一首にまつわる施設を見学した。その中でも私が興味を持っていたのは文学から見える彼らの生活と自然との関係であった。京都研修の6日間の中でも特に私が興味を持ったことについてピックアップして書くことにする。

私は自主研修の一日目で宇治に向かった。源氏物語ミュージアムを見学するためである。その途中で宇治川を見た。その日は雨が降っていたせいか、かなり流れが急であった。私はこの川に落ちたら死ぬだろうなという感想を持った。浮舟を追い詰めていくのは宇治川の音であったそうだ。しかしながら、宇治川の音について聞くことは失念していた。思い返してみると川のものすごい音がしていたように感じたのだが。源氏物語ミュージアムに着いてみると、周囲は住宅街で少し拍子抜けである。この施設は平成 10 年に建てられたものであり、源氏物語や平安貴族の文化について、模型や映像などを通じて学ぶことができる。また、宇治にある施設であるので、源氏物語の中でも宇治を舞台にした宇治十帖について詳しく説明がなされている。源氏物語について紹介している部屋は大きく分けて二部屋であり、一つ目の部屋は源氏物語や平安貴族の文化についての展示がされている。私が特に興味を持っている六条院のミニチュアが展示されていた。この六条院は光源氏が建てたとされる架空の建物である。この六条院は四方向に分かれており、それぞれに四季が当てはめられており、季節に合った女性を住まわせている。春の御殿は南東にあり、紫の上と女三宮を住まわせている。また、光源氏が住む場所でもある。夏の御殿は北東にあり、花散里（はなちるさと）、玉鬘（たまかずら）を住まわせている。秋の御殿は南西の町であり、秋好中宮（あきこのむちゅうぐう）、また冬の御殿は北西の町であり、明石（あかし）の宮（みや）を住まわせている。二つ目の部屋は宇治十帖についての説明がされている部屋であった。宇治十帖は宇治を舞台にした物語である。どうして紫式部は宇治を舞台にして物語を書いたのだろうか。宇治は当時貴族の別荘地であった。それに対して都はより公的な場である。男女の愛欲を語る舞台として、より適している場であったに違いない、といった説明であった。また、他の班もこの源氏物語ミュージアムを見学したようで、その班によれば、宇治を舞台にしたのは「宇治」と「憂し」が掛けられており、悲恋の物語の舞台に適しているのだそうだ。私は

六条院ミニチュア（源氏物語ミュージアム）2014.2.27

見つけることができなかった情報であったので、この説について感心したところがあった。宇治十帖の物語についても詳細に語られているところがあった。浮舟が薫と匂宮の両方と関係を持ち、宇治川に身を投げるまでの物語が分かりやすく描かれていた。私はその前日に比叡山にある横川の僧都が修業をしていたという場所を見ていただけに、大変興味を持って話を聞いていた。

六条御息所、葵の上に襲い掛かる（風俗博物館）2014.2.27

その次に風俗博物館へと向かった。西本願寺の近くにあり、普通のビルの五階に入っているため大変入りづらい雰囲気があった。昭和 49 年にオープンした場所であり、源氏物語の様々なシーンを 4 分の 1 スケールで具現化するという活動を年二回で行っている。今回行われていた展示は六条院の春の御殿の具現化である。建物とそこに住む人の生活が模型で表現されていた。源氏は烏帽子に直衣姿、女三宮は袿姿（うちきすがた）に細長であった。袿姿とは 5 種類の衣をかさねた格好である。試着コーナーにあったので私の班の女性が試着した。重たいといっていたが、ガイドによれば、当時の布は糸が今よりも細いため今のよりも軽いだろうと言っていた。展示の中で特に驚いたのは六条の御息所の生霊が葵の上に襲い掛かっている場面の具現化である。周囲は出産の白い服であるが、六条の御息所の服は黒と赤の重ね着、褻（け）の格好である。細かいところまで具現化をしようとしているのが面白い。他にも当時の貴族女性の重ね着が様々に紹介されていた。

天徳内裏歌合の様子（時雨殿）2014.2.28

次の日私は嵯峨野にある時雨殿を見学した。ここには百人一首についての展示がある。百人一首の起源に関して説明されていたり、かるたや犬百人一首などの百人一首から発展したものについて説明されていた。その中でも私が興味を持ったのは日本古典文学でも説明されていた天徳内裏歌合せの様子である。平兼盛と壬生忠見（みぶのただみ）が初恋の題で競った歌合せである。左右の順で百人一首に載せられているかと思いきや、勝ち負けの順で百人一首に収録されている、との説明があり、面白いと感じた。

私がこの京都研修で発見したのは、貴族は自然を取り入れたがる傾向があるということである。例えば六条院は 4 方向に四季に分かれて建設されており、それぞれに合った植物が植えられたり、女性が住まわされていたりしている。また当時の女性の重ね着の仕方には植物の名前がついていた。緑と白と紅色の重ね着は菖蒲がさねと呼ばれていたり、紫と薄緑の重ね色が藤重ねと呼ばれていたりする。そのように自然を取り入れて生活をするというのが自分の雅さをアピールする方法であったのかもしれない。

京都の機能

1部　日本文化学科
2年　27112104　阿部　萌花

私は今回の研修旅行では、神社やお寺を多くまわりました。下鴨神社、銀閣寺、清水寺、地主神社、祇園、八坂神社、金閣寺、竜安寺、伏見稲荷神社などを見学しました。一日目まず、はじめに訪れたのは下鴨神社でした。下鴨神社は下賀茂という漢字を使うのが正式ですが、鴨川の近郊にまつられているので親しみを込めて「下鴨」という字が使われているそうです。下鴨神社は鳥居をくぐったあと、小さな社がいくつかある。これは、言社（ことしゃ）といいます。7つの社があり十二支の神様（守護神）が祀られていて、左の写真がその社であります。白い看板に干支が書いてあり、自分の干支の社でお参りをします。下鴨神社にはこのほかにもいくつか社がありました。ここは、多くの神様を祀っている京都ならではの神社だと思いました。そして、その後私たちは銀閣寺へ向かいました。京都には今まで二度ほど訪れたことがあったのですが、銀閣寺に訪れたのは今回の研修旅行が初めてでした。銀閣寺に至るまでは、哲学の道という春は桜、秋は紅葉で有名な小道があります。今回の研修旅行は2月だったので、桜も紅葉もなかったのが残念でした。しかし、いざ銀閣寺へ入るととても美しい庭園が広がっていました。銀閣寺はとても苔が美しく東山文化の代表である。銀閣寺の庭園は一見シンプルな作りをしているようにみえます。銀閣寺は、ヨーロッパの建築物のように、細かい彫刻や色とりとりどりの植物がさいているわけではありません。しかし、全体を通すと圧巻する美しさがそこにはあります。その美しさは、設計者の、ち密な計算が作りだしたものです。しかし、その計算に見事に自然と調和しており、日本らしさをうつしだしていました。

干支の守護神がまつられている

銀閣寺の庭園

そして、その後伏見稲荷神社へ向かいました。伏見稲荷神社は日本人にはとてもなじみ深い「お稲荷様」を祀っている神社で、稲荷神社の総本社です。そして、伏見稲荷神社は数えきれないほどの鳥居があります。この鳥居は奉納されたものであり、奉納者の名前や企業名が書いてあります。お稲荷様は、農業や穀物の神様として古くから多くの人々に信仰されています。そして、お稲荷様の使いである狐はお稲荷様の代名詞となっています。

伏見稲荷大社にある絵馬は狐の顔をしていて、自由に顔も書けるようになってとてもバラエティに富んでいました。この神社は一番最寄りの駅「稲荷駅」に着いたときから、朱色の装飾などされており、神社の影響力が物語っていました。そのほか私たちは、多くの観光地を見学しました。高校生の修学旅行のときには回れなかった、清水寺、音羽山の随求堂（ずいくどう）の胎内めぐりを体験しました。これは、全く光のない堂のなかを手すりの感覚のみで進んでゆくというものです。一見とても地味で魅力的に思わないかもしれませんが、日常の生活のなかでこれほどの暗闇を味わうことはできないだろうと思いました。目をつむっても開いても同じ暗闇で、経路の手すりを放してしまうと自分の位置が把握できなくなるほどの恐怖感がその、暗闇のなかにはありました。

稲荷神社の絵馬

私は今回のこの研修旅行を行い、京都の素晴らしさ、日本の素晴らしさを改めて感じることができました。京都は朝廷が長きにわたり君臨しており、日本の中心でありました。なので、多くの文化や技術が成長したのだと思いました。今回の研修旅行で訪れた場所は全てすばらしいものでした。四季がはっきりしている日本の特色を生かした庭園や、釘を使用していない建築物、地域に溶け込んでいる仏閣。これらは全て私が京都でみてきたものである。つまり、京都は日本の長所を最大限に生かし、日本らしさを保ち続けている都市なのだなと思いました。

京都研修を終えて
～歴史・文化を学ぶ～

1 部　日本文化学科
2 年　2712109　生田　未夢

私は、幕末・明治維新についての歴史、西洋建築・大衆文化・食文化についてをテーマとし、調査した。

団体研修では、1 日目四条京町家・東山周辺、2 日目京都御所・比叡山延暦寺を訪れた。

四条京町家は、明治 43 年に建てられたもので、当時の暮らしの様子を知る手掛かりとなるものである。窓に使用されていたガラスは、現在のものとは異なり、表面

表面が凸凹した窓ガラス

が凸凹したものであった。これは、当時の技術が現在の技術にまだ達していなかったためである。また、使用人と家主の暮らしの区別がはっきりとされていたことも分かった。

東山周辺を探索し、日本古典作品でも登場する清水寺について学んだことが印象的である。「清水の舞台から飛び下りる」人々の増減のピークが 3 回あり、主に大飢饉が起こった際に増えていることを学んだ。また、落ちた人々の中で、10 代の人はほぼ存命しているのに対し、60 代以上は 100%死亡していることも知った。

京都御所は、広大な敷地の中に、寝殿造り・書院造り・数寄屋風などの建築様式を調和させ、凝縮している文化財である。

比叡山延暦寺は、東塔・西塔・横川の 3 つの地域に分けられており、この 3 つを総称したものを比叡山延暦寺という。東塔には、総本堂国宝根本中堂がある。西塔には、天台建築様式の代表とされる釈迦堂などがある。横川は、平安から現代に至るまでの多くの文学作品の舞台となった場所である。

自主研修では、幕末・明治維新についての歴史や西洋建築、食文化について様々な場所を訪れた。

幕末・明治維新についての歴史や文化、西洋建築について。私は、西本願寺・二条城・壬生寺・新島旧邸・京都文化博物館別館・無鄰菴・茶道資料館・京都祇園らんぷ美術館・同志社大学・霊山歴史館・京都霊山護国神社・岩倉具視幽棲旧宅を訪れた。

西本願寺内にある太鼓楼は、一時期新撰組の屯所の一部として使用されていた場所である。内部は見ることができなかったが、新撰組ゆかりの地として訪れることができた。

二条城の二の丸御殿は、徳川慶喜が大政奉還を発表した場所として知られている場所である。内部の障壁画は金色に光り輝き、豪華な造りとなっていた。廊下は、「うぐいす張りの廊下」と呼ばれ、床板を踏むと音が鳴る造りとなっていた。人が廊下を歩く音が聞こえることによって、敵が侵入した際にも役立つような造りとなっていたのだなと考えた。

壬生寺内にある壬生塚を訪れた。かつて新撰組の兵法調練場として使われていた場所である。局長の近藤勇の胸像や遺髪塔、暗殺や池田屋騒動で亡くなった隊士達のお墓があった。お花がたくさん供えられており、現代に至るまで人気があるということを実感した。

新島旧邸・同志社大学では、実際に新島襄・八重が暮らした旧邸の内部や資料館などを見学した。和洋折衷な建築様式が取り入れられ、書斎には洋書がたくさん保存されていた。セントラル・ヒーティングや洋式トイレも取り入れられており、当時としては最先端な技術の造りであったことがうかがえる。同志社大学のキャンパスは広大で、チャペルがあるなど洋風な外観であった。

京都文化博物館別館・京都祇園らんぷ美術館について。京都文化博物館別館は、旧日本銀行京都支店であった建物である。煉瓦造りの 2 階建ての西洋建築物である。また、京都祇園らんぷ美術館は、文明開化の際に登場した世界中のらんぷが展示されていた。外国製のらんぷの他に、日本製のらんぷも展示されていた。京都のイメージとは異なる西洋文化が京都の町並みの中で感じることができるのは、不思議な感覚であった。

無鄰菴・茶道資料館では、お抹茶とお菓子をいただいた。無鄰菴は、山県有朋の別荘であった場所であり、無鄰菴会議が行われた場所でもある。池泉回遊式庭園、茶室、煉瓦造り 2 階建ての洋館、木造 2 階建ての母屋からなっている。祇園などとは異なり、閑静な雰囲気であった。茶道資料館には、茶道具の名品が展示されており、普段見ることのできないものを見ることができた。

無鄰菴でお抹茶とお菓子

霊山歴史館・京都霊山護国神社・岩倉具視幽棲旧宅について。霊山歴史館は、日本で唯一の幕末維新総合博物館である。模型や映像で分かりやすく学ぶことができたと考える。京都霊山護国神社には、幕末に活躍した志士達のお墓がある。

食文化について。湯豆腐、茶箱弁当、抹茶うどんなどを食べてみた。豆腐だけでコース料理を作ることができることに驚いた。料理ごとに味や見た目の異なる豆腐がでてきて、北海道とは異なり、味付けが薄味であることに気づいた。茶箱弁当は、素材の味を生かした薄味である。菜の花は苦味が強く苦手であったが、天ぷらにすることで苦味を消し、食べやすく提供されていた。抹茶うどんもまた、薄味であった。汁が薄味であるからこそ、抹茶が混ざった麺の味が引き立っているのだと感じた。全体的に薄味であるが、素材の味を生かした上品な味付けである。

茶箱弁当

以上のことを通して、私自身が興味のあった場所を訪れることができ、見聞を広めることができたのである。また京都を訪れ、見学できなかった場所へも行きたいと考える。

京都で感じた歴史と文化

1 部　日本文化学科
2 年　2712112　石井　詩朗

今回の関西研修旅行で、一番印象に残っているのは、高台寺である。高台寺は慶長 11 年に豊臣秀吉の正室である北政所(ねね)が、秀吉の菩提を弔うために創建した寺院である。造営の際、徳川家康が多大な資金援助をしたため、当時は多くの建物があったらしいが、度重なる火災により、現在残っているのは

写真左が開山堂、右上が霊屋、それらをつなぐ臥龍廊

寺の第一世の住持、三江禅師を祀る開山堂、秀吉と北政所を祀っている霊屋、表門等であり、いずれも重要文化財に指定されている。丁度私が行った時、普段霊屋の中に安置されている、秀吉と北政所の木像が修復され特別展示されていたので、それに伴い、普段は公開されていない開山堂の天井に描かれている狩野山楽作の龍図や、霊屋の中の蒔絵などを見ることができた。龍図は描かれてから約 400 年の間、補修などはされていないにも関わらずとても迫力のある絵であった。高台寺のすぐそば、ねねの道を挟んで向かい側には、北政所が晩年を過ごしたと言われる圓徳院がある。圓徳院は秀吉の没後、高台寺建立を発願した北政所が、伏見城の化粧御殿や庭などを移築して移り住んだのが始まりである。ここが北政所の終焉の地となった。北庭はほぼ当時の形をのこしており、桃山時代の代表的な庭園の一つとなっている。庭の作りはただ大きな石が置かれているだけだが、その石が絶妙な位地に配置されており、巨石の迫力が伝わってきた。巨大な岩がここまでふんだんに使われている庭は珍しいらしく、戦国時代の豪華さ、豪胆さが表れていた。しかし、眺めていると不思議と心が落ちついたのが印象に残っている。

圓徳院　北庭

圓徳院には、北政所を慕って、多くの武将や茶人、禅僧など当時の文化人が訪れたというが、高台寺や圓徳院を見て回ると、北政所ねねは、頭がよくて、カリスマ性のあるひとだったのではないかと感じた。

もう一か所、印象に残っているのが鞍馬寺である。鞍馬寺のある鞍馬山と言えば、義経と天狗の伝説でよく知られているが、今では京都一のパワースポットとも言われている。京都の街中は、観光用に少し作られている部分があるように感じたが、鞍馬山周辺は手をつけられていない自然というイメージで、京都らしいという感じではなかった。鞍馬寺の中には、牛若丸が 7 歳から約 10 年住んだと言われていることから、義経の供養塔や、牛若丸の守り本尊であったと言われる川上地蔵堂、息継ぎの水、背比べ石など義経伝説にまつわるものが多数あるほか、いたるところで水が流れており、「大杉さん」と呼ばれる、樹齢 800 年の願掛け杉があるなど、山全体が自然科学博物苑とされているだけあって自然の迫力と力を感じた。

「大杉さん」と呼ばれる樹齢 800 年の願掛け杉

今回の研修旅行では自由な時間が多く、ほとんど自分の思うように動けたが、やはり京都を回るにはまだまだ時間が足りないと感じた。6 日間通して感じたことは、京都には他にはない人を気遣う文化があるということだ。

例えばよく料理屋などでいう「一見さんお断り」というのもいけずというわけではなく、初めてのお客さんに十分なおもてなしができないことがないようにという意図があるし、全体研修で見た四条京町家でも、馴染みのない人は奥まで入れないとか、通り庭につけられていた「嫁隠し」など、お互いのプライバシーへの配慮がされていて、様々な場面で人への気遣いが感じられた。更に小さいことではあるが、食事などの会計の際におつりが小銭もお札もすべて新しいもので返ってきたことが印象に残っている。そういったことからも思いやりとか、気遣いを感じた。全体通して事前の準備が足りないところが多々あり心残りもあるが、お土産屋さんや、ご飯屋さんなどで地元の方から様々なお話を聞けたり、美味しいご飯屋さんをおしえてもらったりできて、有意義な研修旅行となったと思う。この研修旅行で見たこと、感じたことを、今後研究にいかせればと思う。

古典作品の中の自然と四季
～小倉百人一首と源氏物語から～

1部　日本文化学科
2年　2712114　石川　晴菜

はじめに

古くから京都は文化の中心地である。京都にゆかりのある文学の地を訪れ、体験しなければわからないことを発見することが今回の研修の目的であった。5泊6日の研修で感じた古典作品と自然や四季との深いかかわりについて考察していこう。

考察

第一日目の自主研修では宇治市源氏物語ミュージアムで、源氏物語と平安文化について学んだ。訪れて第一に感じたことは、ミュージアムの庭に源氏物語ゆかりの植物が多く植えられていることである。ウツギやクロマツ、ヤマザクラなどおよそ20種類の植物が植えられており、すべて作中で登場する。ウツギは垣根に用いられ、六条院（ろくじょういん）夏の町に卯の花との垣根があり、クロマツは長寿の象徴であると同時に登場人物の心情と重なり合うように描写され、ヤマザクラは美しい容姿の例えとして紫（むらさき）の上（うえ）の容姿を例えている。

宇治市源氏物語ミュージアム庭

自然は服装の面でもよく見ることができる。それ以前の唐様の時代を過ぎ、日本特有の四季をいかに繊細に装束に表現するかという文化が生まれた。平安の女性は袿姿であったが、布のかさねが源氏物語にもたびたび登場する。表は白、裏地は赤でほのかに透ける桜色は桜かさねと呼ばれ、夕霧の直衣や女三宮の細長で登場する。

平安貴族の装束資料

体験で私は表の布だけを羽織ってみたが、ずっしりと感じられると同時に色の鮮やかさに驚かされた。私が試着したものは現代の布であったためずいぶんしっかりしていたが、源氏物語などに登場する当時の布は糸が現在よりも細く薄かったため、より軽く、繊細なグラデーションであったと考えられる。このように、平安貴族は生活の細やかな部分に自然や四季を表現し、『源氏物語』はそれらを忠実に表現していると考えることができる。

また、この宇治は平安貴族にとって別荘の地であり、都とは対照的な地でもあった。自然に囲まれ、建前の政治の世界からかけ離れた本音の世界である宇治は、源氏物語の最後の愛憎の舞台に最適だったのだと私は感じた。

第二日目は嵯峨野、嵐山を訪れ、小倉百人一首殿堂時雨殿で小倉百人一首と嵯峨野の自然について学んだ。小倉百人一首は藤原定家によって小倉山の小倉山荘で撰ばれた、最古の百人一首であるとされている。

小倉百人一首にはいくつかの特徴がある。三大部立のなかの恋が 43 首と最も多いことや、四季は秋が 16 首と突出しており、紅葉はすべて散る内容であることなどである。また、恋の歌ではなく心情を表す歌として分類すると全体の 3 分の 2 上となる。これらは、晩年の藤原定家と関係があるのではないかと考えることができる。藤原定家は 1220 年の内裏歌合せに提出した歌が後鳥羽院の怒りに触れ、公の出座、出詠を禁じられる。承久の乱で後鳥羽院が隠岐に流されるまで藤原定家は不遇の扱いをうけることとなるが、そのような経験が藤原定家の百人一首編纂に影響したのだろう。写実的というよりは、美しいイメージを重視することで、自然の中に移ろいやすい人の世や心情を投影したのではないかと私は考える。

嵯峨野は宇治と同様に自然が豊かで、渡月橋や嵐山など多くの歌に詠まれている。この自然が、美しくも散る紅葉や月のイメージと少なからず重なったのではないかと研修を通して感じた。

渡月橋と嵐山

以上のことから、平安の文化と自然や四季は密接な関係にあり、自然や四季がその文学にとってどのような意義を持つのかを研究することによって、その文学へのさらなる理解が進むことが理解できた。

おわりに

資料で読むだけでは理解しきれないことが多々ある。実際に自身の目で見て、感じて、考えることでより関心が深まり、理解が進む。四季や自然がただ内容として取り込まれるのみならず、その文学が発生する過程でも大きな役割を担っていることが、自主研修で学ぶことができた。

関西研修旅行を終えて

1部　日本文化学科
2年　2712117　板垣　有咲

今回の関西研修旅行は、私にとって初めての経験ばかりで、非常に新鮮で楽しいものとなった。今まで訪れたことのなかった関西方面へ行き、北海道の良さを再確認し、以前より愛着が増した。京都は2月後半にもかかわらず、北海道の5月のような暖かな春の気温で過ごしやすかった。北海道に戻ると、雪がまだ残っていることが不思議に思えた。ほかにも、住居の屋根が瓦であること、棚田が広がっていたこと、北海道ではあまり見られないような植物が植生していたこと、京都弁を話していることなど、さまざまな発見をすることが楽しかった。

1日目は、ほぼ移動だったが、北海道との違いを見つけては、喜んでいた。具体的には先に述べたようなことである。バスの移動で、地域のすがたを垣間見ることができた。

2日目は、清水寺の舞台に立ち、高校の古典で学習した『検非違使　忠明』でここが登場したことを思いだし、実際に学習した舞台に訪れることができたことに感動した。ほか、知恩院では、現地の大学院生から映画のある場面で知恩院の階段が登場することを聞き、ぜひ観てみたいと思った。この日は徒歩での移動が多く大変だったが、私たちのために下見をして、資料をつくったりなどの準備をしていただいた大学院生の方、井上先生に感謝したい。

3日目は、京都御所、比叡山延暦寺へ行き、京都御所では高校の古典などで何回も登場した清涼殿などを見学することができた。比叡山延暦寺では、まずその場の風景に感銘を受けた。木々の葉は緑色であるのに、地面には白い雪が残って積もっていて、木々の葉が枯れてしまう北海道では見ることのできない、美しく神秘的な風景だった。東塔地区、西塔地区のほかに、あまり他の観光客などは訪れないような横川地区にも、研修旅行だからこそ訪れることができて良かったと思う。

4日目は、自主研修で、哲学の道を通り慈照寺銀閣、祇園方面を訪れた。この日はあいにくの雨だったが、銀閣の静かな佇まいと雨とが非常に合っていて、かえって素晴らしい

ものを見ることができたと、とグループのみんなと感動していた。

5 日目は、この日も自主研修で、伏見稲荷大社、鹿苑寺金閣、祇園方面を訪れた。伏見稲荷大社は、有名な千本鳥居があるが、じつはその鳥居は千本あるわけではないということを知った。このことから、実際に現地へ訪れて、自分の目で確かめることの重要性を実感した。金閣では、この日の天気は見事に晴れていたおかげで、太陽と金閣の壁に張り巡らされている金箔が非常に眩しかった。2 日とも訪れた祇園方面では、（諸説あるが）京都発祥とされるにしんそばや、抹茶菓子などを味わうことができた。また、歴史的景観保存区域の花見小路を通り、時間が遅く中には入ることができなかったが、建仁寺を訪れた。

6 日目は、プレゼンテーションをし、北海道へと無事戻ることができた。京都は底冷えするとはいえ、2 月にしてはあたたかな気候で心地よかったが、やはり北海道のこの寒さや、雪景色も自分は好きだなと改めて地元の良さを実感した。

5 泊 6 日の研修を通して、まだまだほんの少しではあるが、日本の歴史文化を学ぶことができた。2 日目で井上先生がおっしゃっていたように、観光客が求める京都らしさや北海道らしさを探すことを教わったおかげで、研修の内容に深みが増したのではないかと思う。札幌や地元でもそれを気づいたときにでも見つけることができたら、と思う。研修中、歴史的な建造物を見るたび、教科書に載っていたものを追いかけようとする自分がいて、それを自分の目で確かめることも大切だが、その部分だけではなく、背景にあるもの、映らないものも感じ取り、理解することができるよう努めた。この視点を、今後のさまざまな研修でも活かしていきたい。

哲学の道にて

慈照寺銀閣にて

鹿苑寺金閣にて

伏見稲荷大社にて、うずらの焼き鳥

『源氏物語』の舞台、京都を訪れて
ー『源氏物語』と京都の関わりー

1部　日本文化学科
2年　2712133　大野　友也

私は6日間の京都研修旅行で、自分が関心を持っている日本文学について調べることを目的とし、物語の舞台が京都である紫式部の『源氏物語』について知りたいと思い、この研修旅行に参加した。

まず始めに『源氏物語』と京都の関わりについて調べるために訪れたのは、宇治市である。この宇治市は『源氏物語』の「橋姫」から「夢浮橋」までの宇治十帖と呼ばれる後半部分の舞台となっている地である。政治の中心地から離れている宇治は貴族が別荘地として利用しており、本音の世界であった。『源氏物語』の舞台としてなぜ宇治市を紫式部が選んだのかというと、『源氏物語』の前半部分は光源氏を主人公とする華やかな貴族の暮らしがえがかれており、その舞台としては栄耀栄華の象徴であった六条院などの都がぴったりであった。それに対し後半部分は、光源氏の死後の話であり、光源氏の子の薫や浮舟たちの政治から離れたはかなく悲しい恋の物語がえがかれ、まさに貴族たちの本音の世界であった宇治がぴったりなのである。また、宇治という当時の貴族たちにとって身近な地を選ぶことで物語にリアリティーを出すこともできたのである。

源氏物語ミュージアム 1

『源氏物語』の舞台となった宇治市には浮舟が身を投げたという宇治川が流れているが、流れが非常に急であり、想像以上であった。そしてこの宇治川の流れから浮舟が死のうとした決意がかたかったことも感じられた。また、宇治市は全体的に落ち着いた雰囲気の町であり、京都らしい町並みも残りこの旅行で一番感動させられた町で訪れられたことを嬉しく思う。宇治市にある「宇治市源氏物語ミュージアム」では宇治十帖の実物大のセットや、当時使われていたお香などが展示されており『源氏物語』の世界をイメージしやすくなった。時間の都合で宇治上神社や平等院鳳凰堂を見ることができなかったのが少し心残りである。

源氏物語ミュージアム 2

次に訪れたのは本願寺近くの「風俗博物館」である。ここでは、『源氏物語』の前半部分の舞台、六条院が模型で展示されており細かい部分まで再現されていた。その中でも、葵上にとりつく御息所の生霊

風俗博物館

は迫力満点に再現されていて驚いた。また、当時の着物を着ることもでき、今回私は着なかったが、次に訪れた際はぜひ試着してみたいと思う。

さらに、『源氏物語』ゆかりの地として嵐山方面へも訪れた。嵐山には野宮神社があり、黒い鳥居が印象的なこの神社は『源氏物語』の賢木の巻に登場する。周りが自然に囲まれ神秘的な雰囲気の良縁祈願の神社であった。その野宮神社の周りには竹林がありその光景は圧倒されるものであった。この嵐山には小倉百人一首を展示している「時雨殿」があり、ここも訪れることができた。「時雨殿」では小野小町などの歌人についてや歌について細かく展示されていて、百人一首についての理解を深めることができたと感じる。

この研修旅行で、実際に『源氏物語』にゆかりのある場所、また文学作品を展示している場所などを訪れながら京都を見て回ることができ、非常に有意義な研修旅行になったと思う。京都の雰囲気や町並みが楽しめたのは言うまでもなく、『源氏物語』の舞台となった地の雰囲気も感じられたことはとてもよい貴重な体験ができたと思う。この研修旅行で得たものを今後の学習に生かしていきたいと思う。

京都っぽいもの

1部　日本文化学科
2年　2712135　大類　悠

今回の研修旅行の私のテーマは「京都から見る日本文化」、「文化財」というものだった。現地に行って直接体験・経験できる機会は少なく、大変貴重なものだ。この研修旅行では現地に行って初めて分かることなどを経験できた。

私が今回の研修旅行で一番印象に残ったのは「京都っぽいものを作り出している」ということだった。テーマとして京都から見る日本文化をあげていたため、祇園などの古都の町並みが作り出されたものと考えると、このことは大変興味深い。京都の古い街並みを見物することができると有名なのは二年坂と産寧坂で、そこはまさに古都の風景だ。茶屋で抹茶を楽しむことができ、織物を使った小物屋など、「京都っぽいもの」で溢れていた印象だった。しかし観光名所といわれる場所から離れると、ビルが並び、住宅街があるごく普通の町だった。祇園周辺はコンビニエンスストアの色が変わっていたりと景観に気が使われていたが、他でこのようなものを見ることはほとんどなかった。つまり私たちが「京都っぽい」と思っている場所は故意に作られた古都の風情豊かな街並みなのだ。もちろんそれらは文化財群として貴重なものに変わりはないし、作られたものだから悪いということ

でもない。二年坂と産寧坂の風景を見て、かつての日本の街並みを想像し、そこで生活した人々に思いを馳せることが簡単にできる。観光面でも歴史的な面でもメリットが多い。

私は学芸員課程を受講しており、文化財や博物館について考える機会がある。その時常に私は「直接見聞きした経験は貴重で、実際に五感で体験すべき」と述べている。今回一番印象に残った作られた京都っぽさも、このことが言える。京都は、日本は以前このような街並みで、ここに人々が暮らしていたということが五感で体験できるのだ。つまり、作られた「京都っぽいもの」というのは、それ自体が博物館のような、日本文化を体験できる教育的面を備えたものといえる。

私は今回の自主研修の中で、京都から見る日本文化を詳しく勉強したいと考えていた。それには寺社は欠かせない存在であり、今回は伏見稲荷大社について書いていく。

伏見稲荷大社　千本鳥居

伏見稲荷大社は千本鳥居やおもかる石で有名な神社だ。途切れることなく並ぶ鳥居をくぐりながら山頂まで参拝するのは予想以上に疲労した。しかし、歴史が長いこの神社は現地の人からは「おいなりさん」と呼ばれ親しまれており、地域に根差した神社だということがわかる。また、整備されたとはいえ山登りのような道は、一体どのような人々がどのような思いでこの厳しい道のりを参拝したのかということも考えさせられる。

左：伏見稲荷大社　山頂までの道のり
右：伏見稲荷大社　鳥居の文字書き

山頂までの道のりは左の写真のような道が続く。この厳しい道のりを参拝した人たちはどのような人々だったのだろうか。伏見稲荷大社は諸説あるが、五穀豊穣・商売繁盛を祈願し、信仰されてきた。また、赤は火の色、血の色として豊穣の色とされている。このような鳥居をたくさんくぐり抜けることで人々は豊穣を祈願したのかもしれない。

右の写真は新しい鳥居に文字を入れている写真だ。工事をしている鳥居もあり、休憩中の業者の方に話を聞くと、伏見稲荷大社の鳥居は古いものを取り壊し新しいものを建てる。そしてその後その鳥居を奉納した人の文字を入れる。このような作業を見ることができるのも現地ならではだ。

今回の研修では日本文化の新しい見方を学ぶことができ、また自分の目で見、体験する大切さも改めて学ぶことができた。今後もただ見学するだけでなく、その背景まで深く考えていきたい。

京都の衣食住に見る「日本らしさ」

1部　日本文化学科
2年　2712143　岸　香菜子

今回の日本文化演習では、京都で実際に五感を使い体感することで新たな日本文化の側面を知ることが出来た。「日本らしさ」とは何かを改めて考えていくことをテーマとして二日間の自主研修に取り組み、様々な場所を実際に訪ねたことは貴重な経験となった。京都で感じた「日本」について、自主研修における体験を中心に述べていきたい。

自主研修では慈照寺銀閣、龍安寺、八坂神社といった多くの人々に知られた寺社も訪ねたが、私がより興味深く感じたのは京都の衣食住である。着物や和食などの「日本」という言葉から連想されるものが、京都では日常の中で身近に感じられるように思えた。昔からの町並みが保存されている地域があり、古くからの技術が現在に伝えられている。京都が日本文化の中で非常に重要な意味を持つことを、研修を行う中で改めて認識した。

自主研修一日目に訪れた西陣織会館では、五百年余り続く先染紋織物の歴史に触れた。名前にも冠されている「西陣」の地名は、応仁の乱において西軍の総大将山名宗全が陣を構えていたことに由来する。戦乱の後、その陣跡一帯に職工達が居を構え盛んに織物を織り出したことにより、この地で生産される織物が「西陣織」の名で呼ばれるようになったのである。技術の起源は平安朝創設以前まで遡るが、一つのブランドとして確立されたのは応仁の乱後と考えられる。西陣織を今に伝える西陣織会館では、実際に人の手により糸が一枚の織物になっていく過程を見ることが出来た。先染紋織物とは、簡単に言えば色糸で図案を織り上げていくものである。様々なものが機械で生産される現代において、細い糸を人の手で通して一つの絵を織り上げていくことは気の遠くなるような作業に思われた。しかし手間をかけ作り上げていくことで、機械では再現できない微妙な糸の調整、作品としての表現が出来るのだろう。手機に向かう一人の女性の手元を覗き込むと、風神雷神図が見えた。細かい指示が書き込まれたその図案を見て、今何を織ろうとしているのかを知ることが出来た。絵であれば一筆で描ける線でも、何十、何百と糸を通してようやく見えてくるのである。伝統文化の奥深さを感じた。実演を見学した後には西陣織で作られた着物のショーを見ることも出来た。着物の色や柄は現代風にアレンジされ、全く古さは感じられない。直前に見た実演を思い出しながら着物を見ると、作られるものの形は変化してもなお受け継がれる伝統文化があることを強く感じられた。

空引機（そらひきばた）。二人で模様を織り上げる

同日の昼過ぎには「市民の台所」として地元の人に親しまれる錦市場を歩いた。生鮮品を買い求める地元の人の姿が多く見受けられる。1615年に幕府から魚問屋の許可が出て以

来発展してきたのが、この錦市場である。それ以前は具足を扱う店が並んでいたことから「具足小路」と呼ばれていたという。現在では京都ならではの味を楽しめる店が軒を連ねる。八百屋の店先には普段見る機会がほとんどない、京野菜の聖護院大根が並んでいた。他にも京漬物等が店先に並んでいる様子を見ると、京都の食文化の一端を知ることが出来る。そしてこの京都の食文化に欠かせないのが「おばんざい」である。所謂惣菜のことであるが、四季の食材を大事にしている京都ならではの味を楽しむことが出来る。日本の和食が無形文化遺産に登録されたことは記憶に新しいが、京都ではその伝統が日常の中に溶け込んでいるという印象を受けた。錦市場で味わうことは叶わなかったが、別の日に和カフェのおばんざいランチを堪能した。小鉢に盛られたおばんざいは見た目にも可愛らしく、優しい味であった。

菜の花の煮物等おばんざいを味わう

京都に根付く文化を体験しながら町を歩くと、建物にも伝統が生きていることが分かる。全体での研修で訪れた四条京町家で百年以上前から現在まで大切に残されている家屋を見学したが、京都には古くからの町並みが同様に保存されている地域が存在する。重要伝統的建造物保存地区に選定されている祇園新橋には、二階建ての町家が数多く建ち並ぶ。祇園の花見小路では現在も「一見さんお断り」の茶屋が見られる。茶屋「一力亭（いちりきてい）」もその一つである。夜に一力亭の前を歩いたが、名前の入った暖簾と一つだけ点いている灯りが格式の高さを醸し出しているように感じられた。また条例等が制定されていない地域でも、かつての町家の知恵が活かされていることが垣間見られる。家の板塀や塗り壁の裾に設けられた「犬矢来（いぬやらい）」がその一つである。「矢来」とは竹や丸太を縦横に組んだものを言い、壁や家の裾を泥はねから保護するために設けられている。京都の町を歩いていると、至る所でこの犬矢来を見ることが出来た。現代まで続く生活の知恵を何気ない風景の中で感じられた。

家の軒下に見られる犬矢来

京都の衣食住に実際に触れることで、遠く感じていた京都という場所が以前よりも身近に感じられるようになった。私達が生活している日本という国の文化において、京都は非常に重要な意味を持つ。着物、和食、和風建築といった「日本」という言葉から想起されるものにはそれぞれに歴史があり、由来がある。「日本らしさ」とは単なるステレオタイプではなく、伝統が受け継がれ、有形、無形を問わず現代まで残されていることで自然と形成されたのではないだろうか。京都はその伝統的な「日本らしさ」を今に伝える役割を担っている。今回参加した演習では、京都という土地から自分が身を置く文化を改めて考えるきっかけを与えてもらった。日本文化というものをこれからも学んでいくに当たり、この貴重な経験を忘れることなく活かしていきたい。

参考書籍：清水さとし『京都通になる 100 の雑学』(実業之日本社、2013 年)

麻生圭子『京都早起き案内』(PHP 新書、2013 年)

京都文化のおもてなし

1部　日本文化学科
2年　2712147　黒澤　絢華

私は、「京都の人々の暮らし、寺社から日本らしさとは何かを考え、また、そこから日本文化の再認識、新たな発見をする」をテーマに今回の研修旅行に参加した。日本らしさを探るべく自主研修では、鹿苑寺金閣、慈照寺銀閣、晴明神社などの寺社、西陣織会館、京都文化博物館、新選組壬生屯所遺蹟の八木邸など京都の暮らしの文化にまつわる場所を訪れた。私が訪れた場所の中でも特に印象に残った事柄を以下に記す。

まずは銀閣である。銀閣は煌びやかな金閣とは異なり、見る者にどことなく質素でわびさびの精神を感じさせる佇まいであった。銀箔こそ貼られてはいないが庭園の水面に映しだされる銀閣は、まるで本当に銀箔を貼ったかのような姿をしていて、風情溢れる寺であった。また銀閣は現在の和室の原点ともいえる書院造を持つ寺でもある。現代、大抵の家に見ることの出来る和室の原点が銀閣から来ているのだと考えると時代の流れを感じると共に移ろい行く時代の中でも絶えることなく継承される美しさ、伝統文化に畏敬の念を抱いたのである。

銀閣

晴明神社の鳥居、社紋の桔梗

次に晴明神社である。この神社は陰陽師として有名な安倍晴明を祀っている神社だ。通常は多くの神社の鳥居はその神社名を額に飾っているのだが、ここは社紋の桔梗印を額に飾っている。このように社紋を額に入れている鳥居は珍しい。安倍晴明その人自体が謎に包まれている人物なだけに、この神社も桔梗印の額を飾る鳥居だけでなく他にも式神の石像や死者が蘇生したと言う伝説を持つ、一条戻橋のミニチュアなどが有り、他の神社では見られない珍しいもの、不思議なものが多々あった。それ故に謎に包まれた安倍晴明その人自身を彷彿させる神社で大変興味深く感じた。

晴明神社の式神と一条戻橋

最後に京都の人々の暮らしの文化を探るべく、西陣織会館で西陣織の美しい着物を、そして西陣織の職人による手織りの実演を見た。美しい西陣織は気が遠くなるような工程で織られ西陣織のみならず、それを織る織り機にも歴史を感じ、改めて過去から今日に至るまでにその伝統が受け継がれ

てきたのだと考えると感慨深いものであった。また京都文化博物館では京都に暮らす人々がその生活から生み出した伝統文化を多々見ることが出来た。山紫水明な京都が如何にして文化を育み日本文化の形成に関わってきたのかを考えさせられた。

京都に住む人々の暮らしの文化で私が特に関心を持ったものがある。それは祇園祭と胡瓜の関係性についてである。この関係性については新選組壬生屯所遺蹟である八木邸のガイドさんから教えていただいた。当初はこの地を訪れる予定は無かったが、時間に余裕が出来たので訪れることにした。では祇園祭と胡瓜の関係性と何なのだろうか。まず祇園祭とは京都にある八坂神社の祭礼で七月中、まるまる一ヶ月間行われる行事である。そして、八坂神社の紋が胡瓜の切り口に似ていることから祇園祭が行われている間に胡瓜を食べることは八坂神社に対して失礼として七月が終わるまで、胡瓜を食べなかったという。この風習は今でも限られた地域で続いてはいるが七月は胡瓜が旬な時期であるため、絶対に食べてはいけないとの強制は無いとのことだ。

京つけもの・胡瓜生姜

目に見える建築物などの文化だけでなく、古くから伝わる風習も今日に受け継がれているということは私にとっては新たな発見であった。

また、自主研修中に道に迷っていたら、向こうから進んで話しかけてくれた京都の人や私の質問に丁寧に答えてくれた八木邸のガイドさんなどの温かい心遣いに触れ、とても人情のある都市であったとも感じることが出来た。京都という都市は、江戸時代に三都と言われる文化の中心地であった。確かに、京都という都市を見渡せば、あちらこちらに歴史を感じる建物、文化がある。しかしそれだけでなく、京都の人々の人情にも触れ、京都のおもてなしを感じることも出来た。

千年余りの歴史、文化を持つ京都がその当時の歴史や文化の姿を変えずに現代の京都に有る。それは、先人たちの知恵や不断の努力が有ったからこそ、今日に伝わってきているのだと感じる。今回の研修旅行で改めて先人たちの築き上げてきた京都の歴史、文化の息吹を感じ、そしてそこから日本らしさ、日本文化とは何かを考え新たな発見をすることも出来た。受け継がれて行く伝統、それは寺社や西陣織などの有形のものであったり、祇園祭と胡瓜などに見られる風習という無形のものであったりと様々な形を持っている。京都という場所は日本の歴史や文化、伝統が多々あり日本文化の縮図のような場であった。京都は訪れる度に我々を日本文化の美しさ、素晴らしさの世界へと誘う。今回の研修旅行で培った経験を生かして今後の学問研究に活かしたいと考えると共に、もう一度、京都を訪れたい。その際はどのような新発見が出来るのだろうか。とても興味深い。

研修旅行を終えて得たもの

1部　日本文化学科
2年　2712161　佐々木　智香

今回の研修旅行の一番の目的は観光者的目線での研修ではなく、日本文化学科の学生の一員として普段とは違う視点で物事を見聞きし、自分のいる地域とは違う環境下にある場所で新たな人と関わり、知識を身につけるということだった。そのなかで自分の大きなテーマの1つとして「北海道とは違った気候や環境下にある文化に触れながら今後の活動に活かせることを吸収してくる」という目標を掲げ、研修に参加した。主なテーマとしては神社や寺、京都市中の街並みといった建築物と幕末の志士の歴史について今までと違った視点から調査した。団体での研修は京都滞在2日目、3日目。長く話すことは難しかったが、団体研修初日には四条京町家で解説をしていただいた「京ことばの会」の副会長さん、清水寺では立命館大学の院生と話すことができた。また、比叡山延暦寺ではバスの添乗員さんからも短いながらもお話しを個人的に伺うことができた。

団体研修2日間のなかで最も印象に残ったのは「本能寺」にまつわる話しだった。それは現在使われている「本能寺」の「能」の字が元々は左の写真にあるように「ヒ」の部分が「去」の字であったということだ。これは本能寺が頻繁に火災による被害に遭っていたため、「ヒ＝火」を連想させる字は縁起が悪いから「火が去るように」との願いを込めてこの字を使っていたとされている。現に、この文化会館以外にも近くにあった「ホテル本能寺」「ポスター」「本能寺」といった関連のある場所や物の文字も確認したが、全て写真と同じ文字が使用されていた。このことを私は初めて知ったが、今まで教科書で何度も習い、当たり前だと思っていたものが実は事実と異なっていたということに正直驚いた。特にそれが誰もが知りうる「本能寺」という有名な建造物だったために衝撃は大きいものだった。教科書や学校で習うものが全てではないとはよく聞くが、やはり自分の目で見て聞いて正しい知識を得ることが一番いいということをこの体験から改めて強く感じた。

よく見ると「能」の字か少し違っている

個人の研修では2日間、主に幕末に活躍した新撰組ゆかりの地を中心に巡ったが途中途中で神社や寺にも立ち寄った。主に訪れた場所としては光縁寺、護国神社、壬生寺、壬生の里工房、旧前川邸、新撰組屯所跡、霊山歴史博物館といった幕末関係、建仁寺や水火天満宮（すいか）、安井金比羅宮（やすいこんぴらぐう）といった寺巡りをした。

屯所入口

自主研修では新撰組屯所跡（旧八木邸）へ行き、屋敷の中へ入った。屋敷内は撮影禁止のため、写真を写すことはできないが、ここには新撰組のよってつけられた刀傷が今も残されており、当時のものが数多く残されている。また、ドラマや本ではフィクションを交えて歴史的事実とは異なることを伝えているが、ここでは史実に基づいた解説をしている。そもそもここは浪士たちの世話をした屋敷であり、近藤・芹沢といった初期の新撰組隊士らの宿所になっていた。一方で芹沢一派が同じ新撰組であった近藤一派らに殺された場所としても知られ、芹沢一派を近藤一派が粛清する事になった背景には、芹沢一派が大砲などを使用しての軍資金調達を行うといった横暴があったとされる。他にも光縁寺で新撰組隊士、山南敬介の墓参りや壬生寺で新撰組隊士の墓塔を見に立ち寄った。また、壬生の里工房では新撰組の衣装を着て記念撮影も行った。京都では嫌われていた新撰組だが、ゆかりのものが今も数多く当時と変わらぬまま残っていることは実に不思議である。

霊山歴史博物館は日本で唯一の幕末総合博物館である。ここには竜馬を切ったとされる刀や坂本龍馬をはじめ、西郷隆盛など倒幕派志士の遺品とともに、新選組、徳川慶喜、松平容保など幕府側に関する資料も数多くあり、倒幕・佐幕両派がともに活躍したで幕末維新史を双方の視点から見ることができるという他にはない特色がある。また、ちょうど訪れたときには「新島八重再び、続・会津の武士道という新春特別展が開かれていた。博物館近くの京都霊山護国神社には竜馬と中岡の墓がある。近くには右の写真の像が立っており、他にも桂小五郎といった幕末動乱期に活躍した志士の墓や慰霊碑もある。

上：霊山歴史博物館
下：竜馬・中岡像

今回の研修旅行を通じて、現地で多くの人と知り合ったり、話しを聞くことで様々な経験をし、知識を身につけることができた。このことはこれからも日本文化を学ぶうえで自分の視野を広げるための大きな経験となったと感じた。

京都の歴史・食文化に触れて

1部　日本文化学科
2年　2712194　田中　里佳

2月24日から3月1日までの6日間、日本文化演習で京都を訪れて北海道では見ることのできない建物、風景、食文化に触れてきた。団体研修では、清水寺や高台寺、京都御所、比叡山延暦寺などを訪れてガイドの方の説明を聞きながら見学し、現地を訪れなければ聞くことのできない貴重な話をたくさん聞いた。

2日間あった自主研修ではテーマを2つ掲げ、1つ目が「幕末・明治の京都」、2つ目が「京都の食文化」である。1つ目のテーマで訪れた場所は西本願寺、二条城、新島旧邸、壬生寺、京都文化博物館、岩倉具視幽棲旧宅、同志社大学、無鄰菴、護国神社、霊山歴史館である。この中で印象的であったのが新島旧邸、岩倉具視幽棲旧宅、無鄰菴だ。新島旧邸は、同志社の創立者である新島襄と妻である八重が生活していた私邸である。新島旧邸は伝統的な日本の造りと新しい西欧の洋風のつくりを取り入れた和洋折衷の建物で、外観にバルコニーがめぐらせてあったり、暖炉があったりと当時の民家としては珍しい物であったのであろう。旧邸内にある書斎には新島襄が使った机がそのまま残っている。壁一面には書棚があり、当時はたくさんの洋書が置かれていて同志社の学生たちが図書室のように利用していたそうだ。このことから、新島夫妻は同志社の学生たちから慕われていたことがわかる。次に岩倉具視幽棲旧宅についてである。岩倉具視幽棲旧宅は幕末、明治期の代表的な政治家である岩倉具視が文久2年9月から慶応3年11月までの約5年間幽居した建物である。ここへは、地下鉄とバスを乗り継いで行くため賑やかな祇園や四条河原町とは違い、畑や山が広がっていた。また、古風な民家や寺院が立ち並んでおり、普段感じることのできない懐かしさを感じることができた。岩倉具視幽棲旧宅は周囲を塀で囲まれていて、主屋、付属屋、繋屋で構成されている。また、敷地内には展示、収蔵施設である対岳文庫があった。最後に印象的であった場所が無鄰菴である。無鄰菴は山県有朋が造営した別荘で国の「名勝」に指定されている。無鄰菴の大半は庭園が占めており、広い芝生、滝、池がある。建物は2階建ての母屋と茶室、洋館から成る。見学を終えると母屋にお茶とお菓子が用意されており、広い庭園を眺めながら休憩することができた。無鄰菴の周辺には交通量の多い道路があるはずなのにこの別荘内はとても静かで滝から流れる水の音や鳥の鳴き声だけが響く不思議な空間であった。

次に、2つ目のテーマである「食文化」を調査したことについて述べていく。私は、伝統的で体にも良い京都の食文化を実際に味わい、京料理の特徴を調べた。京都ならではの土地、気候によってつくられた京野菜を使った京都の料理は見た目も華やかで初めて味わう上品な味のするものが多かった。2つ目のテーマで訪れたのが茶道資料館、奥丹、美濃幸、うどんミュージアムだ。その中でも特に印象的だったのが「奥丹」の湯豆腐、「美濃幸」

の茶箱弁当である。「奥丹」は湯豆腐専門店で清水にある名店である。メニューは職人がつくった豆腐を使用したものばかりで私は「おきまり一通り」という 3150 円のコース料理を食べた。このコースはメインの湯豆腐をはじめ田楽や胡麻豆腐、精進天ぷらを味わうことができる。「奥丹」の豆腐は手作りにこだわっており毎朝職人が丁寧に造っている。また水は滋賀県北比良地方の地下水を使用しており職人のこだわりが感じられる。豆腐を食べるとなめらかな食感と大豆の風味を味わうことができた。コース料理の中で私が気に入ったのが少しもっちりとした不思議な食感がある胡麻豆腐である。次に印象的だったのが「美濃幸」の茶箱弁当である。「美濃幸」は祇園にある懐石料理のお店で、私はランチの時間だけやっている茶箱弁当を食べた。茶箱弁当は茶道の道具の一つである茶箱を弁当に見立てて造ったもので通常では一万円以上する懐石料理を 3500 円で食べることができる。箱のふたを開けるときれいに盛り付けられた料理が並んでいた。料理は京都らしい薄味のものや白だしの汁物であった。食事のあとはお茶とお菓子で一服して終了である。

今回の京都研修は幕末・明治の歴史や食文化を中心に高校の修学旅行では行くことのできなかった遠い場所にも行くことができた。また、湯豆腐や懐石料理など普段では食べることのできない高級な料理を味わうことができたが初めてのものばかりで味を伝えるのが難しかった。また京都を訪れる機会があれば今回行くことのできなかった場所を巡り、まだまだ奥の深い京都の料理を味わいたいと考えている。

無鄰菴の母屋からの風景

岩倉具視幽棲旧宅

美濃幸の茶箱弁当

親鸞ゆかりの地として見る京都

1 部　日本文化学科
2 年 J1 組　2712197　玉川　雄也

この旅は高校時代のものとはまた一味違う研修旅行であった。クラスや班などの団体行動が主だった高校の修学旅行に比べると、今回の旅行は自由度が高く自主研修時の単独行動も可能である。しかしそのために、しっかりとした自分なりのテーマを持っていないと自身が主体となって旅をしているという感覚を味わえず、大学生の旅としてあまり有意義なものにならないように思った。

この旅で自分が決めたテーマは、浄土真宗やその宗祖の親鸞上人のゆかりの地を中心に寺を巡ってみるというものだった。浄土真宗は門徒数が日本で一番多く、私の家もその一つである。しかし、実際に浄土真宗とはどのような宗派であるかと考えてみると、漠然としか知らないことに気づく。もともと私は仏教についての研究に少々興味があったが、それはただ仏教を東洋思想の一つとしての姿に神秘性を感じていただけであったのだと思う。そこで今回の研修旅行を機に自分にとって身近な浄土真宗をテーマの中心にして寺を巡り、親鸞と浄土真宗がたどってきた歴史を考えてみることにした。

親鸞ゆかりの地と言えばまずは青蓮院である。この寺院は比叡山延暦寺の三門跡寺院の一つとして知られる。ここへは旅行四日目の自主研修の一日目に訪れた。親鸞は九歳の時ここで得度し、没後院内に墓と御影堂が営まれる。これが本願寺の起こりであったため、明治まで本願寺の門主はこの寺院で得度することが条件となっていた。他に親鸞の師である法然が宗祖の浄土宗の本山・知恩院はもともとこの青蓮院内にあった一房が起こりである、つまり天台宗の寺院でありながら浄土・浄土真宗のゆかりの地とも言える。ここが親鸞の仏道のスタート地点である。この後、親鸞は比叡山で修行することになる。

比叡山延暦寺へは旅行三日目の全員での研修で訪れた。この寺は天台宗の総本山であり、親鸞に限らず法然や栄西、道元、日蓮など鎌倉仏教を代表する僧たちを輩出した。親鸞はこの寺で修行に励むが、平氏が滅び鎌倉幕府が建てられる頃に山を下りることになる。

二十年間比叡山で修行をしていた親鸞は、修行をいくらつんでも自分自身の中にある煩悩が消えることはなく自力による修行に懐疑的になっていく。鎌倉幕府が生まれるなど世の中が大きく変動していくときに、親鸞は人間を心底から救い取ってくれる信仰を求めて下山し、六角堂（頂法寺）に百日参籠をする。この寺は天台宗に属し聖徳太子が建てた聖堂と伝えられ、本尊は聖徳太子の化身とされる如意輪観音である。本堂の構造が六角になっていることから一般に六角堂と言われる。その六角堂での参籠 95 日目の明け方夢の中に聖徳太子が現れ親鸞にお告げをしたという。その夢告によって自分のような欲望を抑制できない人間は仏に絶対的な帰依をするほかないと他力本願の法然の草庵へ訪れ入門を果たす。そこが今の安養寺がある場所である。

六角堂・頂法寺

現在の浄土真宗の本山、東・西本願寺が建立される前には山科本願寺や石山本願寺などがあった。このような本願寺の起源は親鸞の娘覚信尼が吉水（東山山麓の地域の中で円山公園の北端から青蓮院にかけてと東大路通りにかけての地域をそう呼んでいた）の北に設けた廟堂である。その後蓮如によって建立された山科本願寺、それから石山本願寺へと移り、さらに顕如が宗主のときに現在の西本願寺に移転することになる。しかし、顕如の息子の教如と准如の対立があり、徳川家康は烏丸

東六条から東七条の間に寺地を寄進し東本願寺が別離された。これは強力な本願寺の力を分散させるという家康の意図があった。

西本願寺

東本願寺

この旅行では、浄土真宗というテーマを絞って京都を歩いてみた。しかしそのためには、まず京都に行く前に下調べが重要になってくるのだが、旅行後のこのレポートのために調べて初めて分かったことがいくつかあった。もっとしっかりと調べて京都旅行に臨めばさらに有意義なものになっていただろうと少々後悔をしている。しかし、この機会に自分になじみの深い浄土真宗という宗派の一端を知ることができたことには変わりなく、さらに京都のいろいろな場所を訪れることにより、ただ古いものや文化遺産が多く残された町として見るのではなく、常に多方面から新しいものを取り込み京都のものにしていくという姿勢を肌で感じることができた有意義な旅であった。

京都の歴史的建造物の魅力

1部　日本文化学科
2年　2712198　田村　有里安

平成26年2月24日から3月1日にかけて、日本文化演習の研修旅行に参加した。団体研修・自主研修で訪れた場所について報告する。

事前に調べていた建造物は金閣寺、銀閣寺、龍安寺、清水寺の4つだ。今回はこの4つに的を絞ることにする。まず、1番関心があった金閣寺についてだ。正しくは「鹿苑寺」と呼ばれ、臨済宗相国寺派の禅寺である。応永4年（1397年）に足利義満が西園寺家の別荘を譲り受け、山荘「北山殿」を造った。義満没後に、夢窓国師を遺言により初代住職とし、義満の法号鹿苑寺院殿から「鹿苑寺」と名づけられた。そして1994

金閣寺

年に世界文化遺産に登録され、現在に至る。実際に訪れると、金箔が張られている舎利殿がやはり 1 番目立つ。とても有名なだけあり、観光客が大勢訪れていた。周りからは色々な国の言葉が聞こえ、日本人を探すのに苦労するほどだった。次に銀閣寺についてだ。銀閣寺は「東山慈照寺」と呼ばれている。金閣寺と同じく臨済宗相国寺派の禅寺である。文明 14 年（1482 年）に足利義政によって建てられた。鹿苑寺にならい、山荘東山殿を造ったのが発祥であり、法号慈照院から「慈照寺」と名づけられた。銀閣寺は金閣寺より、時間帯の問題もあるかもしれないが、観光客が少なかったように見受けられた。金閣寺を一言で表現するならば「派手」だが、銀閣寺は逆に「地味」という印象だ。雰囲気は金閣寺よりも落ち着いているように感じられた。事前に調べた段階で、金閣寺と銀閣寺の共通点を探したいと考えていたが、実際に訪れると共通点ではなく相違点の方が多く見えてきた。名前だけは金閣寺の影響を受けているが、建物のつくりは全く違うものだった。金閣の場合、一層は寝殿造、二層は武家造、三層は中国風の禅宗仏殿造である。一方、銀閣寺は一層が書院風、二層が唐様仏殿の様式だ。共通している造りはない。また、銀閣寺の境内の中にはもうひとつ、東求堂という建物があり、国宝として認められているが、金閣寺の境内には国宝は金閣ただひとつである。この点も違っている。このように、共通点よりも相違点の方が多いことがわかった。龍安寺は、事前に調べた段階で石庭に興味があったため、そこに注目した。石庭は、東西 25 メートル、南北 10 メートルの庭に白い砂を敷き詰め、その中に 15 個の石を配置したものであるが、どこから見ても 15 個数えられず、石が足りないように見えるというものだ。実際に数えてみたが、15 個見つけることは出来なかった。石庭の横に小さくした石庭の模型か展示されていた。その模型を見ると 15 個数えられるのだが、実際には、小さい石が大きい石に隠れ、どこから見ても 15 個数えられないようになっていた。清水寺に関しては、一度訪れたことがあったため、新たな魅了を見つけたいと考えていた。今回も本堂は訪れたが、それよりも随求堂の胎内めぐりに魅かれた。胎内めぐりは左手で手すりをつかみ、暗闇の中を進んでいくと光が見え、光の下にある岩を触りながら願い事とすると叶うというものだ。暗闇といっても、少し視界があると考えていたが、全くなく、目を閉じているよりも暗いといっても過言では

銀閣寺

竜安寺

清水寺

ないくらいだ。胎内めぐりは観光客向けのような気がしたが、清水寺の新たな魅力と感じたため、ここに報告する。

研修旅行に参加して、4 つの建造物を見て、共通して感じたことは、京都全体が観光客向けになっているということだ。お寺のパンフレットには日本語以外の言語が書かれてあり、境内にいるガイドの人も色々な国の言語を話していた。建造物そのものは、日本らしい、古風なものが残っているが、その周りはどんどんグローバル化していると感じた。

京都に残る歴史的遺産から学んだこと

1 部　日本文化学科
2 年　2712200 千田　安佑子

今回の研修旅行の中で私は武士にゆかりのある寺社や仏閣、その他史跡などを歴史区分関係なく幅広くめぐるというテーマを設定し、研修に臨んだ。

今回の研修旅行で私が訪れた場所は次の通りである。団体行動では、京町屋・清水寺・高台寺公園・双林寺・知恩院・白川南通・三条大橋・京都御所・比叡山延暦寺・北野天満宮。個人では、二条城・武信稲荷神社・壬生寺・八木邸・島原大門・西本願寺・東本願寺・三十三間堂・八坂神社・長州藩邸跡・池田屋跡である。

多くの観光客が集まる清水寺参道

京都は日本史において文化・政治ともに要所となり現在に至る都市であると言っていいだろう。そのために歴史的建造物やゆかりある土地も多く、現代ではそれを観光業として活用し現在の京都という街を形成しているといえるだろう。現代まで残る貴重な遺産を大切に、景観を重んじるあたりに観光で生きる京都を維持する努力が感じられる。このため街中に観光客の姿が見られ、特に清水寺などの人気観光地の人の数はすごいものであった。観光客がたくさん来るということは、それまでの京都が文化的遺産を守ってきた努力のたまものであるという証だろうと感じられた。しかしながらせっかく景観を守っても大勢の人が集まることで風情が感じられないなどの問題も起こるようで、そういった面に観光の難しさが生まれているようだ。観光業の栄えた京都という街では歴史だけでなくそういった面でも

新撰組元屯所八木邸

学ぶものがあったといえる。

また、現代の京都の観光に注目したとき、歴史の流れの面白さも感じられた。私は今回の研修で武士、その中でも特に幕末、新選組に焦点をあて研修を行った。新選組は幕末期、会津藩の下につき京都の警備を行うといった役割を担っていたが、新選組を形成する人間の出身は農民の出の者も多く、身なりが汚かったり荒くれた性格をした者が多かったりと京都の人々にはなかなか受け入れられていなかったようだ。さらには戊辰戦争時の新選組は後に賊軍とされた旧幕府軍側であり、戊辰戦争中、戦争後ともに評判や扱いはいいものではなかったようである。しかしながら思っていたよりも新選組にゆかりのある建物は多く残っていた。新選組が屯所として使っていた八木邸には新選組内での芹沢鴨暗殺時の刀傷や、芹沢鴨がつまずいたとされる文机がほぼそのままの形で残されていた。また、第二の屯所である西本願寺にも新選組が使ったとされる太鼓楼が残されている。新選組は京都に嫌われた存在であったにもかかわらず、その存在があったことを証明するものはたくさん残されていた。対して戊辰戦争を制した新政府側、特に長州藩ゆかりの場所である長州藩邸は現在では全く形を失い、現在では高層型のホテルビルとなってしまっている。そこに藩邸があった形跡はほぼなくなり、長州藩邸跡を示す史跡がホテル西側にひっそりとあるのみであった。

現在の長州藩邸跡

このように官軍であった長州藩の長州藩邸は形を失ったが、新選組が関わった建物は今もなお多く残っており、現在では大河ドラマや小説、漫画化などによる人気の上昇も相まって観光地として人気を集めていた。八木邸近くにある新選組も利用したとされている壬生寺には局長近藤勇の遺髪塔や新選組隊士の墓があり、この墓を建てるため政府側への嘆願を行い建てられたとのことである。

長州藩邸跡を示す碑、及び桂小五郎像

京都という地へ赴き、実際に土地を見て人の話を聞いたことで、今まで教科書や本から得ていた新選組に関する知識が上書きされ、嫌われるだけではなかった新選組のことを知れたように思う。嫌われていた新選組が今では観光として取り上げられ、お土産が作られ、京都に馴染んでいるところに歴史の変化の面白さを感じた。それとともに実際に現在に残る建造物を見ることができ歴史への認識に現実味が帯びたと感じる。こうしたことは実際に現地を訪れたことで学べたものであり、非常に有意義な研修が行えたと感じている。

守られている日本の遺産

1部　日本文化学科
2年　2712204　角田　愛理

一日目に平安神宮、銀閣寺、下鴨神社、金閣寺、龍安寺、仁和寺を訪れた。個人的に楽しみにしていたのは金閣寺と銀閣寺であった。「金閣寺の豪華さに驚き、それに比べると銀閣寺の地味な佇まいに落胆する」と、よく耳にしていたが、実際に見てみると、どちらも風情があり感動する。むしろ私は銀閣寺よりも金閣寺に落胆したぐらいである。予想以上に建物が小さかったのである。しかし、どちらも庭園は見事なものであった。銀閣寺は周りを草木で囲み、小さな池が目の前にあり、静寂な空間が施された造りで、足利義政が自らの安らぎを求めてつくられた建造物のように感じられたのに対して、金閣寺は、鏡湖池を中心として小さな島などが存在し、畠山石、赤松石などの名石が配され、庭園の大きさも銀閣寺よりも大きい。個人でひっそりと過ごすためというよりは、来客を招き、見せびらかすための小さなテーマパークといった感じを受けた。

意外性があったのは仁和寺であった。実のところ、寺社めぐりの中でメインに考えていたのは金閣寺・銀閣寺であり、その他の寺社にはそれほど重きを置いていなかったが、仁和寺の広大な境内には驚いた。あまり下調べをしていなかったこともあるが、天皇の旧御室御所ということもあり、大変立派な造りであった。

外観しか見ることができない金閣寺や銀閣寺とは異なり、邸内を歩き回ることができるので、より一層体感でき、感動した。龍安寺の石庭は、思っていたのよりはコンパクトな印象であったが、外国人が多く訪れていたため、外国人にとっては人気がある場所なのかとも思った。やはり、金閣寺・銀閣寺・龍安寺・仁和寺は世界遺産に登録されているだけあって、庭園自体が広大で、見ごたえがあり、この日は雨天であったが、晴天であったらもっとすばらしい景色が広がっているだろうと思う。

二日目はもう一つのテーマであった「武士」について、特に新撰組に関する場所を中心に訪れた。印象深かったのは、壬生屯所遺蹟（八木邸）で、年配のガイドさんが新撰組の説明をしてくださりながら邸内をまわった。邸内にあった、芹沢鴨が夜半に邸を襲われて、応戦しつつも、文机に躓き、その影響で止めを

刺されて命を落とした逸話を聞かされ、その文机を実際に見、邸内で刀を振り回した跡として壁に刀傷が残っていたりと、何百年も前の出来事の跡が現在でもこうして文化財として残っていることで、より現実が増し、さらに歴史への関心が高まるものだと思った。

三十三間堂では、1001 体のご本尊がずらりと整列している姿は圧巻であった。細かく見ると、一つ一つの像が少しずつ異なっており、悲しそうな表情もあれば、うれしそうに見える像もあり、当時の技術者が懸命につくった姿が目に浮かぶようであった。

今回の研修を通して感じたことは、京都の街はどこを歩いていても日本の和を感じさせる建物が多い。都市として発達しているが、要所々々に和が点在しており、日本の遺産を守っているような気がした。じっくりと京都の街を歩いているとさらに歴史というものを感じられるのではないかと思う。また、交通網が発達しているため、移動には便利であり、目的としていた場所をほぼ訪れることが可能であった。京都の人たちも、行き道を困っている私たちを自ら進んで助けてくれ、親切で温かい人が多い街だと感じた。

武士と京都
～源平の戦いから鳥羽伏見の戦いまで～

1 部　日本文化学科
2 年　2712211　中田　千晶

今回の研修旅行は武士と京都、寺社仏閣の関係について、教科書では学ぶことのできない歴史を実際に見ることによって、さらに理解を深めるというのが目的である。団体研修、自主研修を通じて、京都の歴史、文化について学ぶことができ、その目的は達成できたと思う。

五条大橋～義経と弁慶像

平安時代、源平の戦いで活躍した源義経が武蔵坊弁慶と出会ったとされるのが、鴨川にかかる五条大橋である。交通量が非常に多いため見つけにくいが、道路の中央に京人形風の石像が設置されており、義経と弁慶の決闘の様子が再現されている。しかし、『義経記』では二人の出会いは清水観音の境内であるとされ、平

安時代の「五条の橋」は現在の松原橋付近とする説があるなど、義経伝説に関する推察は幅が広く、義経と弁慶の出会った場所の真相はわかっていない。

源氏と戦った平氏側の平清盛が、後白河法皇の命を受けて建立したのが三十三間堂（正式名称蓮華王院）である。建立から約 80 年後に焼失したものの再建され、その後修繕を繰り返しながら、現在もその姿をとどめている。ご本尊は 1001 体の観音像で、ほとんどが鎌倉時代に再建されたものだが、中には建立当時の物もあり、一体一体の表情が違う。そのため、「会いたい人に似た顔に必ず会える」という伝説があり、この観音像は国宝、または重要文化財に指定されている。また、境内南にある築地塀と南大門は、「太閤塀」と呼ばれる豊臣秀吉ゆかりの桃山期の建造物で、重要文化財である。

三十三間堂　※お堂内は撮影禁止

その秀吉が仕えていた織田信長と、焼打ちにされた比叡山延暦寺と同様戦ったのが、西本願寺である。西本願寺は、信長の弾圧で追い込まれるが、信長の死後に秀吉の寄進によって現在の地に建てられた。信長との長期抗争を支えたのは毛利家の支援があったためであり、その縁から、幕末でも本願寺は長州藩、長州志士を支援していた。そのため、本願寺の動きを監視する狙いで、新選組が屯所として太鼓楼を使用していた。

新選組が西本願寺を屯所とする前に使用していたのが、八木邸である。現在は、新選組壬生屯所遺蹟として、京都指定有形文化財に指定されており、当時のままの姿を残している。ひとことで表現すると、新選組発祥の地である。初代局長芹沢鴨の暗殺から、池田屋事件、禁門の変など、激動の幕末を新選組とともに見ていたのが、この八木邸である。屋敷の中はほとんどが当時のままで、近藤勇が腰かけて休んだとされる石や、芹沢鴨暗殺の際ついたとされる梁の刀傷なども残されていた。付近には前川邸や壬生寺など、新選組ゆかりの建物が多く並び、当時は二条城や五山の送り火が望めたと言われている。

八木邸　※こちらも撮影禁止のため門だけ

その他にも、室町時代に足利義満によって建てられた鹿苑寺金閣、足利義政によって東山に建てられた慈照寺銀閣、また『徒然草』に登場する仁和寺、石庭が有名な龍安寺などのお寺や、菅原道真公が祀られている北野天満宮、下鴨神社、平安神宮などの神社を訪問することができた。短い時間にたくさんの寺社仏閣を巡ることができたのは、京都が碁盤の目に整備された都市であることと、だいたいの場所はバスで行けるという交通の便が良いこと、そしてバス停ごとに、訊かずとも行き方を教えてくれた京都市民の方々のおかげである。伏見や嵐山方面には時間の関係で行けなかったので、他の班のプレゼンを聞くだ

けになってしまったが、いつかまた京都に来たときには行ってみたい。

また、個人的に趣味で集めていた御朱印も、お寺、神社ごとに全く違い、非常に面白く、勉強になった。宗派によっては、御朱印をしない宗派があること、御朱印をもらう際のマナーや心構え、参拝の仕方など、普段意識したことがない作法を学ぶよい機会になった。今後も、身近なところから御朱印を集めていこうと思う。

三十三間堂の御朱印

初めての京都で、ただただたくさんの物を見てみたいという気持ちで見学したが、歴史だけではなく文学や文化などの観点から京都を見てみたいとも思うし、まだまだ見たいものがたくさんある。今回の研修旅行は非常に良い経験になったし、今後の日本文化・文学の勉強に役立つものになったと思う。

文化や歴史に触れる京都での学習

1部　日本文化学科
2年　2712218　西出　知弘

この日本文化演習での京都研修旅行は、日本の伝統文化を色濃く感じることができる京都でフィールドワークを行うことにより、文化と称するものの具体的なすがた・かたちを肌で感じることを目的としている。実際の研修では、全体研修もあれば個人的フィールドワークも経験でき、自由度の高い、身になる研修だった。

研修の前半は主に全体研修で、清水寺や知恩院といった昔から現代まで受け継がれている建築物を見学した。特に色濃く記憶に残っているのが、全体で見学させていただいた日本伝統家屋の京町家である。内装や外装、雰囲気を直接感じることだけではなく、主人から直接お話もうかがえたりと、研修ならではの学びができた。また、鐘馗さんという中国の伝説に出てくるものを願掛けとして瓦の上に祀っていたり、小さなレベルででも時代と文化を感じることができた。そのほかにも、比叡山延暦寺での坊主の解説、京都御所内の建築様式や配置の様子などをガイド付きで見学することができ、全体研修として意見交流もできてとても有意義に感じた。

京町家

後半の個別自主研修では、筆者は2013年度の大河ドラマ「八重の桜」のモデルである新島八重にゆかりのある地を巡りつつ、近くにある寺社なども巡った。新島八重は、慶応4年に起こった会津戦争で砲術をもって奉仕し自ら銃と刀を持って奮戦したり、襄の死から間もない明治23年4月26日に日本赤十字社の一員となったり、明治27年の日清戦争では広島の陸軍予備病院で4か月の間篤志看護婦として活動し、40人の看護婦の取締役として働いたりと当時では珍しい行動力のある女性であった。その八重のゆかりの地としてまず行ったところが同志社大学である。同志社大学は、新島八重の夫である新島襄によって1875年に創立された同志社英学校を前身とする大学である。同志社大学では期間限定で新島襄・八重展をしており、今回は運よく最終日であったため見学することができた。この展示では、同志社大学に関わった宣教師の説明や、新島八重が日露戦争時の功績によって授かった勲六等宝冠章などが展示されていたりした。その他にも八重が勤めていた女工場跡の碑を見に行ったり、同志社墓地や会津墓地へ行き荘厳さを味わってきた。特に印象に残っているのは新島旧邸である。新島旧邸は和に洋を取り入れたような様式の家屋で、外観はコロニアル様式を取り入れているもののすべて真壁造りであった。一番興味を引いたのは、当時としては画期的なセントラルヒーティングを設置していたところである。暖炉背面にある1階吹き出し口と2階へ温風を送るダクトがあったりと近代的な暖房のはしりであった。また台所は、当時の京都の民家では土間形式が一般であったのに対して、新島旧邸では床板を張り、その上に流しを置いていた。井戸も室内にあり、西洋の家屋と日本家屋の折衷初期段階が現れていた。その他にも、実際に八重が使用していたオルガンや家具が配置されており、これらは文化財として指定されていて触れることは禁止されていたが、西洋文化の導入時の雰囲気を見学することができた。

新島旧邸

同志社新島襄・八重展

この度の研修旅行は、自主研修の日程も2日あり割と自由度の高い研修であったため、全体見学ではいけなかった自分の興味のある場所をまわることができてとても有意義であった。新島旧邸は明治期の日本と西洋の建築様式がちょうど混ざり始めたころのものでもあるので、雰囲気と風情を楽しみつつ、明治初期の建造物を見学して教養を深めることができ、自由度の高さ故、周辺にあった源氏物語執筆の盧山寺なども立ち寄り見学することができた。また、バスやお土産屋さんで地元の方と話し、おいしいご飯何処も紹介していただけたため、京都を文化・食の両面から堪能し、学ぶことができた。

京都とアニメの関係性

1部　日本文化学科
2年　27122221　橋本　甲

「京都とアニメの関係性」は、年々深くなっているように感じる。 この研修に出かける前から、この話題を耳にする機会は多かった。

京都のアニメ制作会社「京都アニメーション」の作品が社会現象となる程の人気を巻き起こし、作品の実際に舞台となったところやモデルとされている場所を訪れる、通称「聖地巡礼」がブームになってから、その動きは深まっており、2012年から「京都国際マンガ・アニメフェスティバル」というイベントまでもが行われている程である。

この研修で実際に京都に訪れてから、この関係性はやはり強いものだと深く実感した。

この研修では地下鉄での移動が多かったが、京都市営地下鉄の駅には、「地下鉄に乗るっ」というキャッチコピーとアニメ調のキャラクターが描かれたポスターが掲示されていた。このポスターは、京都市交通局が立ち上げた「京都市地下鉄5万人推進増客推進本部『若手職員接客チーム』」といったプロジェクトのもと行われ、地下鉄の利便性をアニメ調のキャラクターを使って呼びかけるといった目的で行われたのだそうだ。このプロジェクトは「若手職員」が行っていることから、若者が関心を持っているもの、引き付けるものとしてアニメを選んでいることから、京都とアニメの密接な関わりを垣間見る事ができる。

次に、このアニメ作品と京都の町との関わりを確かめるために、自分は上京区にある「出町枡形商店街」を訪ねた。

この「出町枡形商店街」は、アニメ『たまこまーけっと』『有頂天家族』という 2 つのアニメに登場する。『たまこまーけっと』とは、2013年に京都アニメーションが制作したアニメで、とある街にある「うさぎ山商店街」に暮らす餅屋の娘である北白川たまこが、ある日人間の言葉を話す鳥「デラ」と出会ってからの不思議な日々と商店街の人々との交流を描いた人情物語である。作中でたまこたちが暮らす「うさぎ山商店街」のモデルとなっている商店街が、この出町枡形商店街である。『有頂天家族』は、森見登美彦の小説が原作である、下鴨神社に暮らす人間に化ける狸の家族と人間たちとの奇想天外な日々を描いたコメディ作品である。作中では、1 話の冒頭で主人公の矢三郎たちが下鴨神社に戻るために商店街を疾走するという場面に登場している。

作中にも登場した商店街の外観

ちょうど小学生が帰宅する時間に訪れたが、地元の小学生の帰りを商店街総出で出迎え、その小学生もそれに応える。そういった微笑ましい風景が、ごく普通の日常として繰り広げられている。この雰囲気は、アニメでも再現されていた。主人公のたまこは、商店街の人々から親しまれ、愛されている。この商店街内の人間同士の温かみこそが、作品を更に際立たせている。

作中でも登場した標語と、タイアップのポスター

登場人物を象った「飛出し注意」の看板

商店街の人々は作品をどう認識していたのか。とあるおもちゃを扱う店を訪ねると、答えが隠されていた。

店主の方が主人公を「たまちゃん」と、まるで孫のように呼び親しんでいた。また、作中でこの店がどの場面で登場するかを、細かに語っていた。

鮮魚店では、ファンから贈られてきた手作りの人形や、イラストなどが飾ってあり、作中との繋がりや、この作品がいかに商店街に根付き、人々の心を繋げたかを語っていた。

また、作品のファンのために、「交流ノート」を設け、「たまこまーけっと」に対する熱い思いやメッセージを書き、ファン同士や商店街の人々との交流を図ろうともしていた。西側の入口には、ファンが寄贈したとされる、登場人物を象った「飛出し注意」の看板も設けられていた事から、この作品は商店街の風景や人々に完全に根付き、親しまれているといっても良いだろう。

アニメ・漫画に関わらず、小説、ドラマ、映画、古典文学の作品など、創作物がその地に思いを馳せながら作り出し、ありのままの姿を描いた事から、その作品は地域に深く根付いてゆく。自分はグループ研修で、源氏物語の舞台や、アニメ「いなり、こんこん、恋いろは。」の舞台にもなった伏見稲荷大社、百人一首と繋がりが深い地域や施設などを訪ねたが、どの場所も、その作品と場所を重ね合わせ、思いを馳せた人々が多く訪れる。また、その地域に暮らす人々や働く人々も、訪れた人々との繋がりをこの創作物を通じて構築してゆく。

そう考えると、創作物が地域にもたらす意味という役割は、微小どころではなく、とても大きいものになっている事をこの研修を通じて実感した。

関西研修にて

1部　日本文化学科
2年　2712225　林　瑛司

私は今回、日本文化演習関西研修旅行に参加し、5泊6日の日程で京都の寺社や史跡などを拝観した。その中でとくに印象深かった箇所を紹介すると、まずは鞍馬山である。この鞍馬山にある鞍馬寺は牛若丸が幼少のころから寺に入ってから昼には学問、夜には武芸に励んでいたところである。この鞍馬山は尊天と呼ばれる「宇宙の大霊である大光明」をあらわしている。ここでは、千手観世音菩薩、毘沙門天王、護法魔王尊をそれぞれ愛、光、力とし、この三身を一体として尊天と呼んでいる。ゆえにこの尊天の活力が特に鞍馬山に満ちあふれているためここが京都で一番のパワースポットと言われている。

この鞍馬寺について初めて知ったのは私が中学生のころであった。知るきっかけとなったのは大河ドラマの「義経」を見て、幼少のころに過ごしたこの鞍馬寺をひと目見たいと思い、今回の研修では前々から行くことを決めていた。実際に行ってみると山の勾配は険しくまさしく修行の場という雰囲気を醸し出しており、荘厳としていたのでやはり京都一番のパワースポットは一味違うなと思った。

鞍馬寺の本堂に続く階段

次に印象深かったのは、西本願寺である。この西本願寺は浄土真宗本願寺派の本山で、この浄土真宗は親鸞聖人が開き、親鸞が師である法然聖人のお導きによって阿弥陀如来の本願を信じて「南無阿弥陀仏」という念仏の教えで、この西本願寺は親鸞の娘と弟子たちが親鸞の遺骨を安置したことが始まりであった。私の家は、浄土真宗であるのでそこの本山は一度は見ておきたいと思い、日本の仏教の礎を築いた親鸞聖人について知りたかったので今回自主研修の中にいれた。実際に西本願寺は予想よりも阿弥陀堂、御影堂が大きく、圧倒された。御影堂の中ではお経がよまれており、坊さんが何人かで一緒によんでいるお経があまりにもきれいな声で驚いた、中に泣いている方もいて自分の心の中に響いた感触があった。

また、坂本龍馬と中岡慎太郎の墓にも行く機会があり、幕末の志士の中で私が一番尊敬しているのが坂本龍馬だったので感慨深いものがあった。

これは西本願寺境内、中央にあるのが御影堂である

坂本龍馬と中岡慎太郎の石碑

今回の研修で学んだこととしては今までは連れられて観光地に行っていたが、自分の決めたテーマにのっとって学んでいくというのは、自分にとって大きな経験になった。また、京都での自分たちが思っている「京都っぽい」というのは人の手が加えられたものが多く、景観を保つために禁煙エリアが細かく決められていたり、ローソンなどコンビニや飲食店でも電光を抑えたり、屋根のつくりが瓦屋根だったりと様々な工夫がなされていてこのような工夫で何千年も伝統として残っていると思うともっと日本の文化について触れたいと感じた。また、京都に行く機会があると思うので自分で何かテーマを決めてフィールドワークをしていきたいと思う。

現代における神社とその信仰

1部　日本文化学科
2年　2712228　廣澤　佑紀

京都には有名無名関わらず様々な神社があるが、それらの中で寺社の特徴に違いがあるのか。祭神と寺社がある場所に何かしらの関連はあるのか。また、自然由来の神と人由来の神で何か差異があるのかという三点に注目して、団体研修や自主研修に臨んだ。

私は自主研修において、上賀茂神社、下鴨神社、貴船神社、平安神宮、晴明神社、北野天満宮、平野神社、今宮神社、伏見稲荷大社の九か所の神社を訪問した。その中でも一番興味をもったのが、上賀茂神社である。上賀茂神社は中心となる祭神「賀茂別雷神（かもわけいかずちのかみ）」以外にも、摂社・末社合わせて二十四柱の神が祀られており、祭神を祭る本殿の側に権殿(本殿の修理や造営の際、ご神体を祭る仮の場)があるのは他の神社と変わらない。しかし、上賀茂神社だけは摂社・末社において権殿の役割を果たす権地が縄で区切られて人の目に見える形で設けられていた。確かに摂社・末社とはいえ、神を祀る以上、扱いにそ

上賀茂神社末社「山森神社」（上）と
その権地（下）

こまで差があるわけではなく、社の造営等のために権地があって然るべきであるが、北野天満宮などの摂神、末神が存在する神社には少なくとも見える範囲で権地として設定されている区域は見受けられなかった。今回は時間の関係上、宮司の人に話が聞けなかったので、次に行く機会があれば明らかにしていきたい。

祀られている神の神徳は、自然由来の神ならば元々の由来から、人由来の神ならば生前の偉業を基に、先天的に決まるものだと思っていたのだが、北野天満宮を訪れて私の中のその常識はあっさりと覆されてしまった。稲荷神社に祀られる神の神徳は本来、商売繁盛・五穀豊穣である。しかし、北野天満宮の末社である稲荷神社に祀られる神の神徳には、これに加えて「火雑除け」というものがあった。これは、昔のあった大火の際、この稲荷神社の手前で火が収まったということに由来しているそうで、逸話さえあれば神徳は後天的に増えることがあるということを物語っている。

伏見稲荷大社は常に人が多く、その大半が外国の人であった。現在の伏見稲荷大社（特に本殿の辺り）は観光名所としての側面が強く、ゆっくり参拝ができるとは言い難かった。稲荷大社の奥まったところである一ノ峰、少なくとも四つ辻の辺りまで行くと人も疎らになり景色も素晴らしかった。どこまでも続く「千本鳥居」も神秘性があり壮観であった。

千本鳥居

古都　京都を歩く

1部　日本文化学科
2年　2712231　藤島　小織

自主研修をするにあたっての私のテーマは、「世界遺産に登録されている寺社や、その土地ならではの文化からみるかつての都」である。

平安時代から江戸時代までの間、京都が政治の中心となっていた。そして政治だけでなく、今も残る日本独特の文化の発祥の地でもある。そのため、他の地域とは違った当時の街並みや建造物が今でも残されている。1994年には世界文化遺産として古都京都の文化財が登録された。登録された寺社とともに、周辺の美しい自然が日本だけでなく世界中の人々から高い評価を得ている。

最近では、数多くある寺社によって商売繁盛や縁結びなどのご利益のある「パワースポット」としても多くの女性を中心とした人々から注目を集めている。縁結びでいえば、島

根県の出雲大社とともにご利益があると言われている地主神社が有名である。この地主神社は清水寺と隣接しており、かつては清水寺の鎮守社であった。明治時代の神仏分離によって独立したといわれている。寺や神社は北海道にももちろん存在する。しかし、同じ寺でもこれだけ距離が離れていれば雰囲気や形にも違いは出てくる。京都は寺の屋根は茅葺屋根だが、北海道では瓦屋根が主流である。さらに気候の違いから、北海道の寺の屋根は雪が落ちやすいような形になっていることが多い。さらに、嵐山を代表とした竹林も北海道ではお目にかかれない自然の一つである。昔ながらの自然を守り続けるという点では、この二つの地域に近いものがあるのではと考える。

嵐山では、竹林の道を人力車に乗って散策した。嵐山と言えば竹林のイメージが強いが、他にも多くの見どころがあった。竹林を抜け、奥に進んでいくと二尊院というお寺がある。ここは嵯峨天皇のお墓があり、天皇皇后両陛下もお参りにいらっしゃったそうだ。さらに、テレビや映画の撮影も行われるなど、今でも馴染みのお寺の一つである。そして竹林の道の中には、野宮神社という神社がある。この神社は縁結びの神社として女性を中心に人気のある神社で、私たちが行ったときも女性がほとんどであった。この神社は源氏物語にも登場する神社で、光源氏が色を変えない木である榊の葉を愛する人に渡し、「この榊のように、私があなたを思う気持ちも色褪せない。」といったことから縁結びの神社となったのである。さらにこの神社の鳥居は黒い木でできており、昔ながらの作りの鳥居が今でも残っている数少ない神社となっている。

嵐山の竹林

野宮神社の鳥居

そしてもう一つ、銀閣寺である。この銀閣寺は、書院造で有名であるが、これと同じように存在する金閣寺よりは、金箔で包まれている金閣寺よりも華やかさは劣る。しかし、銀閣寺のひっそりとたたずむ存在感、周りの自然とうまく調和している外観や空気は、金閣寺以上のものを感じた。金閣寺では当時から残されている華やかさ、銀閣寺では日本らしさと主張しすぎない中にある存在感が感じられた。高校時代に修学旅行で訪れたときとはまた違う感動があった。

銀閣寺

次に、石庭が有名な龍安寺である。この石庭は 15 個の石があるが、様々な角度から見ると数が違って見える、不思議な庭である。自分でも見てみたのだが、うまく 15 個見つけられなかった。そしてこの石庭の奥の壁が、高さが違って設計されている。このように建てることで、本来の面積よりも広く見えるように工夫されているのだ。龍安寺の敷地内には大きな池があり、そこにはかつての公家の別荘であった名残があるように感じられた。この池には、アヒルやカモが生息しており、その池の脇には桜の木が生えていて春は桜の名所としても多くの人々が訪れる。桜だけではなく、侘助椿という日本最古の椿も生息しており、昔から変わらず生きている椿にとても強い生命力と美しさを感じた。

龍安寺の石庭

このように、京都の街と今でも大切にされている周りの自然との関係が、世界中の人々が訪れたくなる理由の一つなのではないかと考える。

私たち日本人も、改めて昔ながらの街並みを通して、歴史や文化を学ぶべきである。今回の研修では、今までに見ていた「表」の京都だけではなく、「裏」とまではいかないが、違う表情の京都を見ることができた。

とてもいい経験ができた研修であった。

幕末を生きた新撰組を知る旅

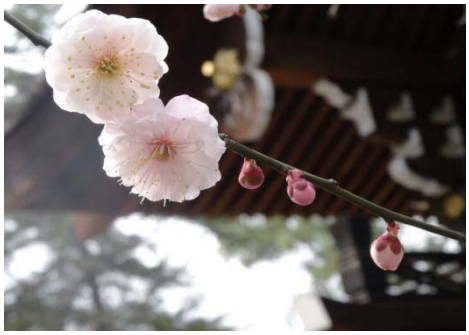
1 部　日本文化学科
2 年　2712235　堀　真利香

私は 5 泊 6 日の関西研修で、多くの人々の助けを借りて乗り過ごすことができた。そして多くの知識を得ることができた。今回新たに京都の素晴らしさ、歴史の流れ、生活を知ることができた。

2 日目はまず初めに、四条京町家で京都の家づくりについて話を聞いた。四条京町家を管理している小泉光太郎さんのお話は、面白く楽しく聞くことができた。京町家の中を実際に見ることができ、当時の生活を見ることができた。午後からは立命館大学の大学院生の方々の案内で清水寺や双林寺、知恩院などを巡りつつ、その場所の解説が面白く印象に残っている。特に清水の舞台から飛び下りるという諺は授業で学んでいたが、どういう理由で飛落ちをしていたのかは知らず、案内してくださった谷崎さんの解説で清水の舞台から飛び下りた理由や男女比、年齢などを知り私は少し賢くなった。賢くなったはいいが 1

日中歩かされ、辛く寒い思いをしたのも今となれば良い思い出となっている。

2 日目は京都御所に行き解説を聞きながら、他の団体の方々と御所を歩いた。土地の広さに驚き、今も天皇が使っている門を見ることができた。次に滋賀県にある比叡山延暦寺に行き東塔区にある根本中堂、西塔地区にある釈迦堂や常行堂、法華堂、横川地区にある横川中堂や元三大師堂、恵心堂を巡った。比叡山にはまだ雪が残っており、奥に進むにつれ雪で足場が悪い状態であった。道産子である私たちは雪の上を歩くことは朝飯前だが、雪に慣れていない滋賀観光のバスガイドさんは途中で断念していた。源氏物語にもでてくる恵心堂に行き、各自バスに戻り出発するのを待っていたが、バスがなかなか発進せず「何事か」となっていたが、どうやら先生（2 名）が戻ってこないというハプニングが起こった。バスに戻っていた先生方は電話をしていたが通じなく添乗員さんが探しに行き、無事先生方が戻ってきたのでバスが発進することができた。この日は予定より時間が余ったらしく、帰りに北野天満宮に寄った。流石本州。梅が開花していた。天満宮には牛が置かれており体で良くなりたい箇所を触るとご利益があるといわれているらしく実際に触ろうとしたが、諸事情により一旦触ることを諦めた。しかし、境内には何頭か牛が置かれており、無事触ることができた。



北野天満宮にて～梅の花～

自主研修では新選組に所縁がある場所を巡り、新選組に関する書籍を集めていた。自主研修初日は実際に新選組が暮らしていた屯所や新選組と繋がりがあったお寺などをメインに、光縁寺、旧前川邸、八木邸、壬生寺、京都新選組町作りの会、島原大門、西本願寺太鼓楼を訪れた。光縁寺では新選組総長であった山南敬助の墓前に手を合わせてきた。壬生寺では欲しかった書籍が手に入った。八木邸では新選組について話を聞くことができた。京都新選組町作りの会では新選組の衣装に袖を通した。私が着た袴は現代仕様なので履きやすく、歩きやすいものだったが昔は素材も違うし歩きにくいものだったということを知った。大小の重たい刀を持ちながらの巡回や、長州浪士を捕縛するということは一苦労だったのではないだろうか。そしてわかったことが 1 つ。私の身長（149cm）では大刀は抜けないということが判明し、悲しい気持ちになった。そして、下駄もなかなか歩きにくいもので、何度転びそうになったことか。

自主研修 2 日目は霊山歴史館、建仁寺、太秦映画村を訪れた。霊山歴史館では新島八重特集をしていて、初公開の資料を見ることができた。新選組が名を轟かせた池田屋騒動をミニチュアで再現されており、池田屋でのできごとをわかりやすく理解するこ

建仁寺にて～風神雷神図屏風～

とができた。その他にも、坂本龍馬が暗殺された近江屋のミニチュアも展示されており、坂本龍馬がどのように殺されたかわかる。徳川慶喜や坂本龍馬、土方歳三の等身大パネルがあり、徳川慶喜の身長を見て驚いた。昔の日本人は身長が低かったということは知っていた。しかし、徳川慶喜の身長が 150cm だとは思ってもいなかった。徳川慶喜には良い感情を抱いていなかったが、今回パネルを見て何か近いものを感じた。建仁寺（けんにんじ）は当初予定になかったが、国宝の風神雷神が特別公開されていることを知り「この目で確かめよう」ということになり寄り道をしてみた。実際に見て「流石国宝」という感想しかでてこなかった。太秦（うずまさ）映画村では江戸時代の町並みが再現されていて、江戸時代にタイムスリップした気分になった。

2 日間の自主研修を経て、新選組についての資料や話を聞くことができ、収穫が多かった 2 日間であった。今まで知らなかった事実を今回の自主研修で知ることができた。今までよりも新選組について調べたいという気持ちを強くさせられた。資料も欲しかった書籍も今回入手することができ、とても満足している。

島原大門前にて

太秦映画村にて〜池田屋〜

京都で体感した衣・食・住

1 部日本文化学科
2 年　2712237　松倉　優羽

私は衣・食をテーマに京都市内での研修を行った。日本の文化の代表地である京都に存在する日本らしいものを知ることによって日本文化とは何か考えるためである。

まず食文化として、日本の歴史ある街としての京都で食べられる和食について書く。

錦市場「いけまさ亭」の月替わり定食

錦市場「いけまさ亭」の月替わり定食（1800 円）。定食の内容は、京野菜を用いたおでんと炊き合わせ、大根の酢の物、青菜の漬物、白米である。これは、食後に予定していた錦市場での食べ歩きをやめるほどの量があった。京野菜は大根、人参、牛蒡が用いられていたが、普段食べているものとは異なる点が多いものであった。大根はとても大きく、1/4 の大きさで入っていた。表面だけしっかりとした堅さがあり、内側はふわふわして瑞々しかった。人参はとても鮮やかな色をしている点が特徴である。しかし、普段食べている人参は色が濃いと味も濃く癖が強いが、この人参は色がこんなにも濃いにも関わらず、独特の癖がほとんど無かった。これらの 2 つの野菜は甘さが強いのも特徴として挙げられる。牛蒡は形がドーナツ型であり、食感もホクホクとしていた。味は普段の牛蒡とあまり変わりないようにも感じたが、独特のホクホクとした繊維の感じが、私の中の今までの牛蒡のイメージを変えた。普段の牛蒡ならばこのような大きさで食べようとは思わないだろう。炊き合わせでは、普段あまり見かけない生麩という食材と出会った。普段食べている焼き麩とは異なり、もちもちとしてねっとりとした食感が特徴的だった。見た目はこんにゃくのようだが、全く異なるものである。味が染みているというよりは、もともと生麩自体に味が付いていると感じた。錦市場は地域住民も利用するような市場としての側面もあるが、観光客も多い。食べ歩きができるような商品もたくさん売っているなか、おいしいからといって満腹になるまで定食を食べてしまったことだけが後悔される。

「総本家ゆどうふ奥丹清水」
ゆどうふ一通り

「総本家ゆどうふ奥丹清水」ゆどうふ一通り（3150 円）。大きな京町屋だった建物をつかうお店でいただく豆腐尽くしのコース料理である。湯豆腐は口の中で豆腐がとろけてしまうようでおいしかった。湯豆腐をいただく前に刺身のような豆腐（写真左上）やとろろ、豆腐の山椒味噌の田楽（写真右上）が運ばれてくる。コース料理なので順番に 1 品ずつ運ばれてくる。湯豆腐の後には野菜の天ぷら（写真右下）とご飯、お味噌汁が運ばれてくる。この時点で豆腐しか食べていないはずなのに予想以上の満腹感を感じた。豆腐だけでコース料理ができると言う点が一番の発見だが、高価な店にもかかわらずお客さんが多かったこと、しかし観光地の真ん中にもかかわらず日本人のお客さんしか居なかったことに驚いた。

祇園「美濃幸」茶箱弁当（3500 円）。 食器の外見が茶道の道具（野点の茶箱）に見たてられたものである。具体的には、茶碗＝飯椀、茶布筒＝向付、棗＝汁、振出＝焚合、掛合

祇園「美濃幸」茶箱弁当

＝八寸焼肴、茶杓＝箸というような茶道具一式が用いられている。以上を用いて、点心といわれる軽い中食としてお茶の前に食べるものとして仕立てられた懐石料理である。箸と同じような長さの箱の中に2段になって入っているだけなので、上の湯豆腐と同じように見た目の量はとても少ないように感じる。しかし腹8分目以上にはなる量が実際にはあった。懐石料理は日本料理の代表であり、高級料理である。それがこのような形になって食べられることで、手の届くものとなり、日本の代表料理をより多くの人が食べられるようになると思った。また食後にはお抹茶と干し菓子（写真右下）がいただける。このことによって京都と日本のイメージであるお茶会も少しだけ味わうことができる。

次に衣文化として、風呂敷について書く。風呂敷は昔の人やおじいちゃんおばあちゃんが使うもの、古臭いものというイメージを私も持っていた。しかし風呂敷は現代でも使うことができるとても便利なものであると実感した。その例として次のお店が挙げられる。

「京都 掛札」蝙蝠柄の風呂敷とお店外観

「京都 掛札」（写真左）蝙蝠柄の風呂敷、（写真右）お店外観。蝙蝠柄の風呂敷は、実際に私が購入したものである。このお店の特徴は、実際に肩掛けバッグの形に結んだ状態で展示してある点と全ての柄が伝統的な模様のアレンジであり、その意味を教えてくれる点である。蝙蝠柄は「子守り」とかけて子孫繁栄「福を呼び込む動物」という意味が込められている。色もパステルピンクに青と水色という派手な組み合わせになっているため洋服でも使うことができる。他にも、着物や浴衣に合う和柄のものを扱うお店もある。その例としては次のお店を挙げる。「永楽屋 細辻伊兵衛商店」（写真左上）風呂敷、（写真左下と右）手拭い。上の店と比べて和柄であるが、アート性も感じるものになっている。この他にも多くのお店がある。伝統的にある風呂敷や手拭いを用いる文化は、日本人にとってあまり身近ではないが、様々な用途に応じ、お洒落に進化しているものである。このように日本が誇るべきものを日本人がもっと知り、活用するべきである。

「永楽屋 細辻伊兵衛商店」
風呂敷と手拭い

以上のことにおいて新たに知った点、自分の知識や考えを覆したり異なったりする点が多々あった。これらのことをこれから深く調べて考え、日本文化を知るための材料としたいと考えるとともに、意識的に日本文化の中で生活しようと考えた。

研修旅行を終えて

1部　日本文化学科
2年　2712245　村中　光

はじめに、この研修旅行に行く少し前にゼミが決定した。私は菅さんのゼミになったので、事前ガイダンスで話していた「言語景観」に関する違いも見つけてこようと決めた。まず、駐車場を意味する「モータープール」は、二日目の清水寺から高台寺公園へ向かう途中で発見した。そして、私にとって興味深かった電車のアナウンスの違いは、四日目の自主研修初日に確認することができた。この日は京阪線を利用したが、そこで「扉を開けます」「扉が閉まります」というアナウンスを聞いた。「ドアが開きます」「ドアが閉まります」というアナウンスを聞き慣れている私にとってすごく違和感のあるものだった。

次に、自主研修での成果について記述する。私は、事前に立てたテーマをもとに、源氏物語・宇治十帖の舞台である宇治市を訪れた。今回の目的は、物語の世界観を実際に見て感じ取ることだった。京阪宇治線宇治駅に着き、まず気になったのは「京阪のる人、おけいはん。時をめぐる旅に出た。」という広告であった。「おけいはん」とは、京阪電鉄のイメージキャラクターであり、「けい子さん」という意味だそうだ。「時をめぐる旅に出た」という言葉は、千年の時を越えて受け継がれている源氏物語の舞台である宇治市にぴったりだと感じた。

宇治川　流れが速い

源氏物語最後のヒロインである浮舟が入水自殺を試みた宇治川は、想像以上に大きく流れの速い川で驚いた。天気も悪かったので余計に迫力満点であり、このようなところへ飛び降りるほど思い悩んでいた浮舟の切ない気持ちを想像することができた。

「源氏物語ミュージアム」では、宇治十帖の悲恋の物語を映画で見た。浮舟の視点から人形劇で描かれている『浮舟』は、彼女の心情をひしひしと感じ取ることができた。人形の顔が少し怖いと感じたが、その怖さが浮舟の苦悩を暗示しているようにも思われた。『橋姫－女人たちの心の丈－』では、題名通り女人たちの心が描かれていたが、登場人物が多いこともあり、人間関係が分からない部分があったので、もう一度ストーリーを読んでから見たい。しかし、文字でしか読んだことのなかった源氏物語を映像で見ることによってリアリティを持ってイメージできるようになったことは大きな収穫であった。宇治十帖をテーマとしている「宇治の間」ゾーンでは、平安貴族たちが親しんでいた香りが紹介されているのが興味深かった。宇治十帖の主人公たちが「薫君」「匂宮」と呼ばれていることか

双六　現代のものとは異なる

らも分かるように、平安時代の貴族社会の中で、「香り」は芸術的な文化として発展していた。それらの香りについて詳しく紹介されていた。平安時代と光源氏をテーマとした「平安の間」では、牛車や十二単を始め、いろいろなものが復元されていたが、中でも貴族たちの遊びに関する展示に興味を持った。貝合わせや偏つぎという昔ならではのものもあったが、双六や囲碁という現代まで受け継がれているものもあった。しかし、双六は私たちが目にしたことのあるものとはかけ離れていて、時代の流れを感じた。

続いて、源氏物語散策の道として親しまれる「さわらびの道」を通り「宇治上神社」へ向かった。道中には宇治十帖にゆかりのある和歌が詠まれた石碑や、光源氏という椿など、物語の世界に寄り添うことができるものがあった。

そして宇治神社、興聖寺、平等院へと回り、途中で甘味処にも寄りＪＲ宇治駅へ行った。この間、紫式部像や宇治十帖のモニュメントを見つけることができた。宇治神社には源氏物語についての説明書き、甘味処「憩和井」では「浮舟プレート」というメニューがあった。さらに、ＪＲ宇治駅の目の前には平安貴族のデザインが施された道案内があった。これらから、千年経った今でも源氏物語が地域に根付き、愛されていることが感じられた。

京都市に戻り、風俗博物館に行った。風俗博物館では、『竹取物語』『源氏物語』を切り口に、平安時代の生活の場面が模型で再現されている。こちらの人形は、映画『浮舟』とは異なり怖さは感じられなかったので、親しみを持って眺めることができた。衣装や楽器、植物など、細部まで忠実に表されていて、説明書きも親切だったので楽しめた。

金閣　自然の緑によく映える

自主研修二日目の目的は、北海道にはない世界観を感じ取ることだった。野宮神社、竹林、二尊院、龍安寺、鹿苑寺金閣を見に行った。これらは有名な名所だが、全て初めて訪れた。金閣は本当に金色に輝いていて、教科書の写真からそのまま飛び出してきたようだった。緑の自然の中に金色はとても映えていた。竹林もとても印象に残っている。右を見ても左を見ても竹林が広がっていて、息を飲んだ。また、源氏物語・賢木の巻に登場する野宮神社を実際に見てみたいと思っていたので、願いが叶ってよかった。このように、写真でしか知らなかったことを実際に自分の目で確かめることができた。竹林は写真の何十倍ものスケールに感じられたので、やはり実際に見てみることで発見し、自分の知識に

することができるのだろうと考えた。

五泊六日の旅は長かったが、まだまだ回りたい場所はたくさんあり、足りないくらいだと感じた。しかし、源氏物語の世界を実際に見ることでイメージを膨らますことと、名所を実際に目にすることで自分の知識にすることという二つの目標は達成できたので、とても有意義な旅だった。さらに、宇治市内で源氏物語に関するさまざまなものを見つけたことで、この文学が千年にも渡って人々に愛され続けている様子を発見できたことも収穫であった。ときに人生の夏休みとも揶揄される大学生活も残り二年だが、この二年のうちにもう一度京都を訪れるとさらに学び取れるものがあるように思われる。今回の旅はそれほど価値のあるものだった。

京都巡り
～時代の変遷が見られる都～

1部　日本文化学科
2年　2712247　森内　達也

私が今回参加した日本文化演習では、普段過ごしている北海道では感じることができない京都の文化、特に神社・お寺を中心に自分の足で歩いて、直に触れることができる貴重な体験であった。ここでは、今回の研修で私が感じたことを述べていこうと思う。

団体研修では今回の研修で私が一番訪れたいと思っていた清水寺に訪れることができた。清水寺は京都の定番観光スポットであるため、また時間帯が昼ごろであったためか参拝者が多かった。自主研修で訪れた鹿苑寺（金閣寺）も同じく参拝者が多かったが、外国人が圧倒的に大多数を占めていた。諺や浮世絵に使われている清水の舞台を実際に見ることができたが、私が想像していたよりも低いように感じた。「清水の舞台から飛び降りる」という諺があるが実際には飛び下りても生きていれば願いがかない、死んでも成仏できると考えられていることから、清水寺は、観音信仰の中心的な寺院であることがわかる。これまで233人中34人が死亡（14.6%）しており、意外にも死亡率は低いことがわかる。

慈照寺庭園

展望所からの慈照寺

自主研修ではまず銀閣寺に訪れた。正式名称は慈照寺、臨済宗相国寺派の禅寺である。個人的には一番京都らしく、日本文化を感じることができた。私は高校生の頃に慈照寺に訪れたことがあるが、義満が創建した鹿苑寺（金閣寺）にならって東山山荘を設立したため、どうしても慈照寺と鹿苑寺を比較してしまい、見た目の華やかさで慈照寺を劣っているように見てしまうことがあった。しかし、今回訪れてみると、その印象は凡て覆った。まず庭園の素晴らしさに圧倒した。境内に入ると一般的に銀閣寺と呼ばれている観音堂や東求堂などの建物、池、向月台、銀沙灘が点在している。慈照寺の特徴はやはり庭園だと感じる。木々の手入れや配置は庭師の技術力を代々高く保持し、現代に活かし続けている。建物も庭園の木々を邪魔することなく、共に絶妙なバランスで配置されている。慈照寺を創建した足利義政は鹿苑寺を創設した先代の足利義満とは違い、地位や権力を前面に押し出すのではなく庭園や自然が見せる美しさによる安らぎを人々に与え、自分の将軍としての地位を見せていたのだと感じる。

鹿苑寺

続いては金閣寺である。正式名称は鹿苑寺であり、臨済宗相国寺派の禅寺である。写真でもその壮大さは伝わるが実際に訪れるとその壮大さに圧倒される。まさに創建した足利義満が、将軍としての自分の地位を見せつけていることが直接感じることができる。金箔を重ねた金閣は迫力があり、さらに金閣だけではなく金閣を水面に映す鏡湖地には名石が多数配置されており、室町時代の代表的な池泉回遊式庭園を表したつくりになっている。一番の写真の撮影スポットで撮影した写真は下図にあるが、四方八方どこから見ても美しく見えるように計算された美が実際に訪れた際の最大の魅力だと感じた。また、参拝客は圧倒的に外国人が多く、見た目としての幽艶な美しさに心惹かれるのは日本人だけではなく世界共通だということが感じられる。

南禅寺　水路閣

また、南禅寺の水路閣に訪れたが和風の境内に突如洋風のレンガ造りが立ちはだかる光景に衝撃を受けた。水路閣は第三代京都府知事の石

垣国道氏が首都機能移転後の京都復興のために琵琶湖疎水計画を実行に移した際に施行された水路橋である。西欧技術が導入されて間もない時代に日本人のみの手で設計、施工されたものである。このような日本古来の景色ばかりではなく、西洋建築の文化が混ざり合っているのが不自然ではなく、時代の変化を表しているのも京都っぽさを演出している。

日本という国は北海道のアイヌ文化、沖縄の琉球文化など様々な文化があるがその他の地域にもさまざまな文化が存在しており、文化と文化が時に混ざり合って新しい文化を生み出してきた。京都も同じく歴史的な国宝、街並み、文化遺産という「日本」を観光客に見せている。私はこの研修旅行によって新たに日本という文化に興味を持つことができ、魅力的な国であることを再発見できた有意義な旅であった。

動乱の都～文化の都へ

1部　日本文化学科
2年　2712253　山田　遥希

今回の関西研修は、自主研修も含めて、初めてづくしの日々であった。団体研修は、昔ながらの暮らしが残る京町家、立命館院生による案内が付いた東山名所巡検、念願の京都御所、織田信長が焼き討ちにした比叡山延暦寺である。なんと言っても、1 番嬉しかったことは、（延暦寺と御所を除いて）現地集合だったことである。故に、集合時間まで、自由に京都を散策することができた。

研修 2 日目、日が昇る前にホテルを抜け出し、朝の西本願寺と東本願寺、京都タワー地下の温泉へ行った。もちろん、歩いてである。普段、大勢の観光客がいる時間帯と違い、朝の京都は違った「まち」に見えた。しかし、朝 6 時頃の西本願寺には、既に、観光客の方がちらほら見え、昼間とは違う姿を見ていたのではないだろうか。京都タワー地下の温泉は、行く前の予想では、近所の常連さんが集まって、世間話でもしているような状態を考えていたが、甘かったのである。常連さんに見えるような人は、1 人もおらず、だいたいどの方もキャリーバックを引いており、観光客だと察しがついた。ただ、温泉は良かった。滞在中にもう一度行く予定だったが、時間がなく断念した。団体研修 1 つ目は四条京町家である。かつては、多くの町家が残っていたらしいのだが、時間の経過に伴い、なくなった町家が多い、と聞いた。確かに、町家の周りはビルやマンションなど、現代的な建物ばかりとなっていた。どの「まち」でも、歴

御所の方角に土下座する高山彦九郎

史のあるモノを残すのは難しい、と改めて実感したのである。ただ、気になったのは1つ、五右衛門風呂の説明が、石川五右衛門の残虐性を表す話ではなく、ガッカリした。2 つ目は、清水寺・知恩院などを含む東山名所巡検である。清水寺、高台寺、双林寺、知恩院、祇園、鴨川、東山界隈の名所は近世の頃からガイドブックが出るほど人気であるが、反面、防災の先進的な地域でもある、と聞き、驚きと同時に、「やっぱり、京都、すげーな！」と感心した。しかし、1 番の感動は夜の食事（交流会）の最後にあった。この日、案内は、村中先生の後輩にあたる谷端郷さんと谷崎友紀さん、先輩にあたる井上学先生の3名である。井上先生が、我が故郷、江差町を褒めてくださったうえに、好きになった、と教えてくれて、感謝してもしきれないのである。井上先生の話は江差の人に伝えるつもりだ。この場を借りて、井上先生にお礼を申し上げる。ありがとうございます。住所でも聞いておけば、江差線グッズなどを送ろうと思っていたのだが、聞く機会を逃した。

研修3日目、この日も朝ホテルを抜け出し、御所の先にある梨木神社と幕末の志士が多く過ごした木屋町界隈を散策してきた。団体研修 3 つ目は、京都御所見学である。私は、大きな勘違いをしていた。御所に入る直前まで、御所の周りの御苑見学だと思っており、蛤御門や朔平門を見に行こう、と考えていたくらいだ。故に、ショックが大きく、メモを取りながらガイドさんの話を聞いていたが、心ここに非ず、であった。しかし、念願だった御所に入れたことは、言うまでもなく、嬉しいのである。もちろん、バスの出発まで時間があったので、全速力で蛤御門へ行ってきた。4 つ目は、比叡山延暦寺である。織田信長が焼き討ちにしたことで有名だが、最近の研究では、焼き討ちは小規模なもので、虐殺された人々も少ないらしいのである。また、延暦寺を目指すにつれて、雪が増えてくるのは驚きであった。そして、二度と行きたくないと決めた場所でもあった。なぜなら、山道のカーブが苦手だからだ。異常なまでのカーブで、具合が悪かったことしか覚えていない。

京都御所の蛤御門

自主研修は、2 日間まとめて述べる。テーマは 2 つあったがまとめると、「幕末～動乱の都から明治～文化の都へ」である。私が 2 日間で散策できたのは、2 代内閣総理大臣山縣有朋の別荘で、日露戦争開戦直前の国の行く末を決めた無鄰菴会議が開かれた「無鄰菴」、新島襄・八重夫妻が眠る熊野若王子神社の「同志社墓地」、幕末の会津藩が陣を築いた「金戒光明寺（黒谷）」、龍馬が京都での拠点としていた「寺田屋」、新島夫妻が暮らした「新島旧邸」、勤皇の志士が眠る「霊山護国神社」、日本唯一の幕末専門の博物館「霊山歴史館」、京都での洋食始め「レストラン菊水」、新撰組始まりの地「壬生寺」「八木邸」、徳川幕府を終わらせた地「二条城」、日本映画の父ゆか

旅籠 寺田屋

りの「等持院」、映画のハリウッドを物語る「東映太秦映画村」、宇治抹茶の名店「茶寮 都路里」、京都人の「衣」を支えてきた「高島屋」である。高島屋は予定では無かったが、展示会をやっているということで、行ってきたのだ。

おおまかではあるが感想を述べる。徳川慶喜の大政奉還を考えたと言われている坂本龍馬は、京都で、現在も材木商を営んでいる「酢屋」（木屋町）と、今も旅籠を営む「寺田屋」（伏見）を活動の拠点としていた。2 つの拠点のメリットは、「情報伝達の速さ」にある。木屋町にある酢屋と伏見の寺田屋を結ぶものは、森鴎外の小説にも代表されるように「高瀬舟」である。江戸時代の豪商角倉了以が開いた高瀬舟は、幕末の志士たちに多大な貢献をした。故に、高瀬舟が通る界隈には、志士たちが多く住んでいることがわかる。酢屋の南には、土佐藩邸や、龍馬が暗殺された近江屋、北上すると、佐久間象山や、大村益次郎の拠点、長州藩邸や彦根藩邸、木戸孝允（桂小五郎）夫人松子（幾松）のいた料亭など勤皇派の人々の住処となっていたのである。池田屋騒動はこの近くで起こっている。酢屋で、坂本龍馬のことを話すようになったのは、ここ 2～30 年前らしく、それ以前は、代々、タブーとされてきたという。故に、龍馬が暗殺された後、時のご当主は、龍馬の遺品をほとんど焼き払ってしまったそうだ。今、残っていれば、いかに役立ったか予想することはできないのであるが……。「東映太秦映画村」は、かつてのように時代劇の撮影はしておらず、昨今は、現代劇の撮影ばかりと聞き、変えることのできない時代の流れにショックを受け、「日本のハリウッド」はかつての栄光だと実感させられた。昨年の大河ドラマの影響で、入館者が倍増した「新島旧邸」とうってかわり「金戒光明寺」や「同志社墓地」は静かなままだった。一方、「壬生寺」「八木邸」「寺田屋」「霊山護国神社」「霊山歴史館」は、いつみても、人が集まっている。老若男女を問わず、幕末に惹かれる人が多い、と言うことを感じられた。しかし、それは、有名な箇所ばかりである。行く予定では無かった高島屋では、「暮らしと美術と高島屋展」が開かれており、高島屋 180 年の歩みを知ることができた。

京都という「まち」は、794 年～1867 年までの間、日本の首都であり、今もなお、一部の京都人は「天皇陛下は東京に遊びに行っており、帰ってくる」と言われている方々がおり、ステキな「まち」だと感じられた。今回の研修でもそうだが、あえて、たくさんの疑問を京都に置いてきた。また、行くときの楽しみが減らないように……。

寺社仏閣と御神籤

2 部　日本文化学科
2 年　2812107　石塚　裕太郎

私は、今回の研修旅行で興味を持ったことは、神社や寺院と御神籤の関係についてである。御神籤は、神社や仏閣で人々の吉凶を占うために引く籤のことを言い、私も寺社見学や自主研修の時に沢山の御神籤を引き、清水寺で一番初めに引いた御神籤が凶という結果であったことから興味を持ったのである。

御神籤は、古代日本において国の祭政に関する重要な事柄や後継者を決定する際に神の意志を占う際に、籤引きをしていたところに起源があるとされている。現在ある御神籤の形が生まれたのは、鎌倉時代の初期と言われており、元三慈恵大師良源上人が創始者である。当時の御神籤は、自分たちで籤を作りそれを引いて吉凶を占うのが一般的であったのである。良源は、おみくじの元祖の様な存在であり、天台宗の第 18 代の座主であり、比叡山延暦寺の中興の祖と知られ祀られている人物である。しかし、私は、延暦寺での御神籤の結果も凶であったことから、非常に不吉な思いを感じたのである。また、御神籤を神社などの境内の木に結び付ける行為は、江戸時代のころより神様と縁を結ぶ行為として行われ始めたのである。さらに、凶の御神籤を利き手の反対の手で結ぶことにより、困難な修行を達成したこととなり、凶が吉に転ずるという言い伝えもあり、私も境内のみくじ掛けに結んできたのである。

御神籤が、普及していった背景には、当時の人々が神や仏を区別することなく進行していたところにあると考える。神仏習合の歴史があるように、土着の神道と渡来して普及した仏教が混ざり合うことにより、様々な信仰を生み出したとされており、神仏に対する信仰心があることにより御神籤のありがたみ等を感じて普及されていったものと考える。しかし、明治時代に神仏分離が行われたことにより、同じような存在として扱われていた神仏も分けられることとなり、神社と寺院も分離されることとなったのである。だが、民衆の中では戦時中を除いて、民間信仰やお祭りなどは各地方の伝統として伝えられていることが多く、現在にも色濃くその文化は残されているのである。このことからも、現在でも御神籤が多く引かれていることに、結び付いているものであると考えられる。

清水の舞台

しかし、現代の日本人は信仰心が薄いといわれており、特別な行事がない限り寺社にはかかわりを持たず、または、観光目的で訪れるだけ

であるとも言われているのである。このことは、今回の研修旅行中も沢山の寺社を回り、訪れた際に感じたことと似ており、世界遺産などに登録されている有名な寺社には、非常に多くの人々が集まっていたのであるが、あまり有名ではない寺社にはあまり人がおらず、残念な印象を受けたのである。これは、御神籤や御守りを購入することにも通じるものがあると考えており、その寺社に祀られている神仏への信仰を忘れてはならないと感じたのである。私も、その観光者の一員であったが、今回の研修を通じて神仏への信仰についても興味を持ち、これからの大学生活で学べるも機会があれば、沢山のことを学んでみたいと考える。

金閣寺の不動堂

龍安寺の石庭

日本文化演習を終えて

2 部　日本文化学科
2 年　2812108　伊藤　淳雄

今回は著者に強い印象を与えた清水寺、龍安寺、妙心寺の三箇所について著者が感じたことなどを紹介したいと思う。

著者は清水寺を訪れるのは今回が二回目で高校の修学旅行で見た風景とあまり変わらない風景を今回も見ることとなるのだろうと思っていた。谷崎さんの清水の舞台から飛び降りるといった「飛落ち」の歴史や井上さんの清水寺の災害史とPM2.5 の影響の話を聞き、清水寺の抱える問題を実際に目にすることができた。「飛落ち」をしていた者の多くが著者たちと同じ 10 代から 20 代ということで幾ら願いをかなえるためでも大怪我をし

清水の舞台と PM2.5 の影響で霞んでいると思われる京都の町並み

てまでするものではないと思った。高校の時の修学旅行の時は写真のように京都の町並みは霞んではいなかったが今回はひどく霞んでおり、中国の公害問題が日本を代表する観光地に大きな影響を及ぼしていることがよく分かった。

龍安寺では枯山水の石庭の美しさに驚かされた。枯山水の石庭に水がないのにそこに水があるかのように砂利で波紋が造られていた。特芳禅傑らによって考えられた石の配置が謎めいていており、どうしてこのような配置にしたのかがとても気になった。派手さはなく、ただ石が適当に並んでいるように見えるが、その中にも砂利で作られた波紋やまっすぐに伸びる線が美しいものであった。このような石庭は日本人にしか造ることのできないもの、まさに「メイド・イン・ジャパン」とはこういうものだと直感的に思った。時間が許すのであれば、何時間でも居たいと思えるくらい心の落ち着く場所であった。

妙心寺では法堂の天井に描かれた狩野探幽の雲竜図や明智風呂と呼ばれる明智光秀の霊魂を弔い、浄めるといった意味から造られたサウナ式の浴室があった。法堂の雲竜図は躍動感に溢れ、四方八方から竜の眼を見ても必ず竜と目が合うという不思議な傑作であった。

龍安寺の石庭

天井に描かれた竜は顔がワニ、角がシカ、ひげがナマズ、爪がタカやワシ、体がコイ、目がウシといろいろな動物を組み合わせたもので見方によっては竜が天高く昇っていく昇り竜と天から舞い降りてくる下り竜にも見え、見る人の心を楽しませてくれるものであった。さらに法堂には黄鐘調鐘（おうじきちょうしょう）と呼ばれる日本最古の鐘があった。この鐘は 698 年に造られ、現在もその姿を留めている。ただし、次に鐘をつくと壊れる危険性があるため、現在は鐘をつかないそうだ。そのため、著者が聴いた鐘の音は CD の音源であった。CD の音源であってもその鐘の音は心を落ち着かせ、感慨深いものであった。是非とも実際の鐘の音を聴いてみたいものだ。

最後に今回の日本文化演習では今まであまり気にしたことのなかった庭園や寺院の造りを気にすることが多く、先人たちの知恵や技術を目にすることができた。また京都に行く機会があれば、今回の経験を生かして、探索してみたいと思う。

明智風呂

研修報告レポート

2 部　日本文化学科
2 年　2812110　岩佐　慶樹

（1）はじめに

私にとって京都への旅は、高校 2 年生での修学旅行以来であったため実に 4 年ぶりの訪問であった。本レポートでは今回の研修旅行にて実際に京都へ行き、感じたことと学んだことについて書いていく。

（2）観光地

京都は、歴史ある昔ながらの古い建物が残っていることが魅力の一つである。2 日目・3 日目の団体研修の際に訪れた「清水寺」や「八坂神社」、「京都御所」「北野天満宮」などがそういった魅力にふくまれるであろう。長い歴史の中、変わらずにあり続けたかのような存在感が、訪れた人々を魅了するのであろう。

京都御所①

しかし、今回の研修中に目にしたように、こうした歴史を感じさせる名所も、長い年月の中で老朽化が進んだこと（例：京都御所）や悪天候などによる災害（例：清水寺）や人災などにより損傷したことを理由に現代技術による修理工事が定期的に行われているのである。そうした修復が何度も行われているのにもかかわらず、京都の各名所は違和感を与えることなく、長い歴史がしみ込んでいるかのような存在感を私たちに与えていると、私は感じた。

京都御所②

今回の旅行を通して感じたのは、京都の人々が協力して「外からの京都のイメージ」を守ろうとしている、という意思である。先述の通り一般的な京都という街に対するイメージは「歴史の中の街」であると思う。京都の人々はそのイメージを崩すことなく、尚且つ無理をしない形で維持しているのだ。訪れる前までは、街と名所の成り立ち

京都御所③

程度しか知らなかったが、実際に訪れたことで作られたものを「遺すための努力」を学ぶことができたと私は考える。

（3）京野菜

4 日目・5 日目の自主研修にて、私たちの班は京都府内の亀岡市にてフィールドワークを行った。しかし、私自身は当日、病欠のため訪れることができなかった。ですが、会う予定であった亀岡市役所の職員の方に訊く予定であった質問を班員に代わりに訊いてきてもらったので、それを基に「京野菜と他の野菜との比較について」まとめていく。

事前の調査から私は「京野菜」と言うものは京都と言う土地に根付いたものであり、後世に遺すため研究・改良繰り返され、大切に守られてきたものだと考えていた。

実際に京野菜を生産している農家では、兼業可能な体制をとっており、大規模な農作業行い大量生産をするのではなく、府内に供給するための最低限な生産に留めているとのことであった。また、地域毎に別々の京野菜が生産されている場合があり、地域風土の影響や出荷バランス調整のため分けられているとのことであった。これらのことから、「京野菜」という伝統野菜は、京都という土地が長い歴史の中で築いてきた質を維持するために、農家だけではなく地方自治体や市場関係の方々の手も加わり、作られ続けているのだと考えられる。

しかし、伝統野菜である「京野菜」を作る農家にも一般の農家と同じ問題点や悩みがあるということも分かった。その一つが「後継ぎ問題」である。兼業可能でやり易い体制を多くの農家がとり、意欲のある 20 代～30 代の人間を募集しているのだが、後継ぎ探しは難題であるとのことだ。

以上のことから、「京野菜」というものには土地に根付いた独自の文化を形成しているのと同時に、他地域で数多く流通している他の野菜と似た面も持っているということが窺えると私は考える。

（4）おわりに

今回の研修旅行は有意義な面が多くあったが、やはり 4 日目・5 日目の半日病欠による調査への不参加はとても辛いものとなった。何時か実際に亀岡市にきちんと訪れ、今回出来なかった調査を埋めるのと同時に、「京野菜」という文化についてさらに調べてみたいと思う。

京都っぽい京都を巡る

2 部　日本文化学科
2 年　2812123　坂口　大介

「京都」といえば我々が想像するキーワードはやはり“寺社仏閣”“古い”“茶”などである。これらに対し事実的に存在している近代的なビル群、デパート街などは所謂京都っぽくない景観だといえる。しかし、京都に住む若者などが日常的に利用するのはこの京都っぽくない便利な場所である。寺社仏閣の周りは景観を損なわないよう比較的ビル、デパートなどは少ない。それどころか比叡山など修行を目的に山中におかれているものさえある。では便利ではないこの場所がこれほど維持されているのか。第一に単純に文化的な価値が高いという点。延暦寺の不滅の法灯、妙心寺の龍雲図。これらのように何百年も前の当時の技術がそのままの形で残っているものを途切れさせてはいけないという思いも維持に大きく関係している。第二に京都以外の地に住む人間が求める京都がそういった時代を切り取ったような景観にこそ収まっており、京都側もそこにビジネスを置いている。拝観料や賽銭は税とは無縁の為、安定した一つの収入源であり、売り買いする場も限られてくる為、コストが高くても購入してしまう。神や仏に対する真面目さは古くから受け継がれており、百円を勝手にいれて一枚おみくじを持って行ってくださいといういい加減なシステムが成り立つのはこの”神様がみてるかもしれないからちゃんと百円払って引こう”という日本人気質にほかならない。実際考えてみると年始に大量印刷された紙切れ一枚を引いただけで一年を決めつけられるというのも馬鹿らしい話である。しかし何故だか気になって毎回引いてしまうのはもしかしたら本当に神様や仏様の引力なのかもしれない。添付した写真をみれば上記は結果に納得いかないただの戯言になってしまうのがやや虚しい。

人生で初めての凶である。六日間に不安が感じられたのは言うまでもない。

この後も行く先々でおみくじを引いたのだが、おみくじの結果をおみくじで払拭しようとしていたことに途中で気づき、自身も上記で挙げた日本人気質が芯に通っていると再認させられた。

一日目一番最初に引いた
おみくじ

さて、本題に戻るが私は京都っぽさをテーマに演習を進めた。我々がエジプトに求めるものがビルではなく砂漠であるように、テンプレート的な京都を探し、ただただそれを見て喜ぶだけでなく、これほどまでに世間の意識に京都として浸透させたものたちが陰でどのように努力され、維持されてきたかを見極めることを主題とする。有名なものでいえば私は

金閣寺

二条城　蘇鉄

金閣寺を第一に挙げる。

荘厳で神々しい輝きを放つ金閣寺だがこれも再建という形の維持がなされてきた京都っぽさである。

さらに別の形で私が感動したものは二条城の庭園にあった。

これは寒さに弱い蘇鉄を昔から引き継いできたこも巻きという手法で守り養生するものだ。どちらも京都っぽさを維持する為の努力の表れである。

以上のように我々が想像する京都は様々な方法と知恵によって守られており、それゆえにこれほどまでに観光客の心を鷲掴みにし魅了するのだと考えられる。

最後になったが演習では京都の魅力の発見、班員やさまざまな人との交流の深まりと得たものが非常に多かった。これを糧により良い学校生活を送れればと思う。

古都を巡る
～かつての都にみた良き“日本”～

2 部　日本文化学科
2 年　2812128　下浦　康太

私は今回で京都は 2 度目の訪問であった。前回行ったときは高校二年生の時で、団体研修では清水寺、金閣寺などお決まりのコースは見て回ったものの自主研修では他の班員の動向に従う羽目になり、もともとの予定に全く組まれていなかった河原町や京都駅周辺など札幌にいても見ることのできるようなさほど変わらない道をひたすら歩き続け、その夜は班員が持ち込んだパソコンで無理やりアニメを見せられ泣く泣く床についたことは今でも鮮明に記憶している。そこで私は今回自主研修の目的を寺社仏閣巡りとした。いかにもという感じではあるが高校の時スタンダード中のスタンダードのコースをまるで回ることのできなかった私にとって、王道こそ憧れであった。それでは私が自主研修中に巡った寺社仏閣を特に感銘の受けたものをいくつか紹介していこうと思う。

今回自主研修で回ったのは金閣寺、龍安寺、仁和寺、妙心寺、二条城であった。二条城の他は寺と寺がそう遠くもなく、特に金閣寺、龍安寺、仁和寺は木辻通り、きぬかけの路

仁和寺御殿内南庭とポーズをとる坂口氏。邪魔である。

という一本の道に面しており、京都の街並みを歩いて堪能したかった私にとってとてもありがたかった。行程を組んでくれた班員の伊藤氏には特別な感謝を捧げたい。金閣寺の神々しい輝きを見、龍安寺の石庭で心を和らげたあと、次に向かったのは仁和寺である。仁和寺と言って真っ先に思いつくのは徒然草の第五十二段「仁和寺にある法師」であろう。少し阿呆な坊さんの話があるこの寺だが、私が想像していたものより遥かに広かったのである。なにも考えずに東門から入った私は入ることのできない五重塔や金堂を見た後あっけなかったなと思い西門から帰ろうとしたところふと境内から下を見下ろすと大きな門があった。それは仁和寺の正面玄関ともいえる二王門であった。その途中にある御殿にも気づかずに帰ろうとしていた私は「仁和寺にある法師」に登場する坊さんと同じレベルの阿呆に違いなかった。御殿に入ればそこは手の行き届いた庭が広がっていた。その開放的かつ優美さ感じさせる庭は世界的に有名な龍安寺の石庭よりも私はいたく感動した。御殿の中は庭に出たりしたりしなければ自由に歩き回ってもよく庭園や風情ある建築物たちを存分に眺めることができた。次に訪れる時は名勝「御室桜」を是非見たいものである。

仁和寺を訪れたあとは近く喫茶軽食篝（かがり）で京名物にしんそばをいただいた。気さくに話しかけてくれる店主と店員さんは次に向かう妙心寺までの道のりまで教えてくれた。ところが道中強い雨が降り、傘を持っていなかった私はずぶぬれになりながら妙心寺に辿り着いた。しかしこの雨ではとてもじゃないが拝観はできなかったので結局最寄りのコンビニエンスストアで傘を買うことに。辛くもコンビニから妙心寺に着くころには雨は弱まり晴れ間まで見え始めていた。ああ無情。このお寺、境内を歩くのは散歩気分で良いのだが法堂などに入るには別途拝観料がかかるので注意。しかしここの法堂の天井に描かれている狩野探幽の大傑作「雲龍図」は一見の価値あり。法堂の中は撮影等が禁止になっているが、20 分ごとにガイドさんが中を案内してくれるので記録より記憶に残りやすい。この旅で最も感銘を受けたのがこの「雲龍図」であった。この絵、なんと見上げる位置によって龍の頭の位置、表情が変わるのだ。何度回ってもこちらを睨みつけてくる龍はまるで生きているかのような錯覚に陥りそうになった。

妙心寺法堂の「雲龍図」。写真は撮れなかったので配布されたパンフレットを撮影

最後は二条城を紹介しておこう。私自身城郭に上がるのは初めての経験であり、幕末に

大政奉還の時慌ただしく城内を走りまわっていた人々の様子を想像したりすると感慨深いものがある。残念ながら本丸御殿は現在公開休止になっていたので実際に中に入ることができたのは二の丸御殿と呼ばれる武家風書院造りの建物である。初めて入った二の丸御殿は圧巻であった。天井ははるか頭上にあり、歩けばキュッ、キュッと音がする鶯張りの床、大政奉還が行われたという大広間は格調高い襖などで彩られており只々目を奪われるばかりであった。城内を歩けばこれまた素晴らしい庭園が広がっており一人で歩いていても飽きることはなかった。（決して班員に置いてかれたわけではない。）元来城というものは戦のために造られたものであるから侵入者を防ぐため堀や高い城壁があるのだがやはり実際に見てみると写真やテレビで見るのとそのスケールの違いに驚く。百聞は一見にしかずとはまさにこの事だろう。

二条城二の丸御殿。その時歴史が動いた。

一度目の旅で京都という街をまるで堪能できなかった私であったが、今回の旅はしっかりと街並みを、寺社仏閣を見ることができて良かった。強いていうなら目的地の下調べをもっとしていれば・・・と悔やまれる部分はあるもの、それはまたここに来ようと思わせてくれる一因にもなっている。また、集合時間に遅刻し、引率の先生方、添乗員の武田さん、友人、他の学生の方々にも多大な迷惑をかけてしまったことをこの場を借りてお詫びしたい。ただそのおかげで新たに親しくなれた先生や友人もいるのでそういう意味でもとっても実りのある旅だったのではないかと思う。

京都の良さ、日本の魅力

2部　日本文化学科
2年　2812136　成田　萌華

私は、自主研修で霊山歴史館に行きました。そこで、坂本龍馬や中岡慎太郎のお墓を参拝しました。

霊山歴史館には、坂本龍馬などの幕末の志士だけではなく、近藤勇や土方歳三などの新選組に関する資料や徳川慶喜など幕府側の人々の資料がたくさんありました。坂本龍馬をきった刀や、血のついた鎖帷子などが展示してあって、暗殺現場の臨場感を感じることができました。また、龍馬暗殺のシーンや池田屋事件をリアルなフィギュアをつかった映像で見ることができるコーナーもあり、ドラマを見ているようで非常に興味深かったです。歴史館だけでなく山の墓のほうには、坂本龍馬や中岡慎太郎の墓碑のほかにイギリス人外

交官のアーネスト・サトウのお墓などがありました。霊山から見た京都の街の景色はとても美しく、激動の時代を生きた志士たちも、ここならば心安らかに眠ることができるだろうなと思いました。

団体研修では、京都の昔ながらの長屋に行きました。

幕末に関する資料がたくさんある霊山歴史館

長屋の見学では、気さくなご主人と美しい京都弁を話す案内の方々に、心癒されました。長屋も、古き良き日本家屋といった風情で、ここに住みたいと思いました。この旅行で私は、京都を含め日本の魅力を再認識しました。札幌に帰ってきてからは、札幌ならではの良さに気づくことができました。これからも、日本各地の様々な魅力に気づいていけたらいいなと思います。

長屋の中庭にあった鶴と椿

屋根に囲まれた中庭

茶道と幕末

2部　日本文化学科
2年　2812137　野呂　千穂

日本文化演習京都の旅で、私は幕末に活躍した偉人たちと京都の茶に関することについて知識を深めた。二日間あった自主研修の1日目に茶道資料館を訪問した。日本で初めて茶室を建てたことで知られる千利休の所縁の地であり、岡倉天心の「茶の本」を読んで興味を持ち、茶道資料館へ行くことに決めたのである。入場料を支払うと、入場券と一緒にお茶券も渡された。一階の呈室でそちらを提示すると、最初に和菓子が差し出される。品のいい甘みを舌で感じながら、続いて卓上に置かれた抹茶もいただいた。もっと苦みのあ

る味を想像していたのだが、ほどよく渋みがあり、非常に飲みやすいものであった。飲み終えた頃合いを見計らって茶碗の説明もしてくださった。その説明の中で横文字の陶芸家の名前が挙がったことに私は少々驚いた。茶の文化は東洋人の間でだけではなく、西洋人の間にも浸透しているのだと改めて感じさせられた。抹茶をいただいた後は、陳列室に並べられている品々を観覧した。茶碗や茶道に関わる道具、掛物などがあり、掛物の中には風景画の横に短歌が綴られているものもあった。二階の陳列室には、裏千家を代表する茶室「又隠」の写しがあった。岡倉天心は「茶の本」の中で、茶室は花や掛け軸などの美的感情を満足させるために置かれるものを除いては空虚である、と語っている。私は文献を読みながら、その空虚さとは何から生み出されているのかと興味を持った。実際に目の前にして思ったことは、非常に簡素であり、そして美しいということだ。無駄なものはすべて排除したような造りで洗練された雰囲気を肌で感じた。美的感情を満足させるには十分であり、空虚な空間そのものが日本的美しさを表しているのではないかと私は思ったのであった。

自主研修の二日目には、霊山歴史館を訪れた。行ってみて非常に満足したところは、複製だけではなく本物を目の当たりにできるというところだった。二階に偉人たちの顔写真とともに説明書きやその人物に関わる遺物などが置かれているコーナーがあった。そのコーナーで特に印象に残ったものが、無残に切り裂かれ血の付いた服であった。それを着ていた者がどのような死を遂げたのか、布切れ一枚が生々しく語っていた。その他にも実際に戦場で使用された火縄銃や銃弾などもあった。別の階には坂本龍馬を中心とした人間関係図やパソコンで特定の人物を選択すれば、その人物の生涯を簡潔に学べるコーナーもあった。幕末の歴史の知識が豊富である人、あるいはそうでない人にも満足できる歴史館であった。

二日間の研修を終え、またいずれ私は私の意志で京都に行くだろうと思っている。普段机の上で学び、想像だけで補っていたものを、実際に京都という地に赴いて目の当たりにすることで、さらに深く茶道や幕末の歴史について学びたいと思うようになった。今回得たもの、体験したことを、今後の大学生活にも生かしていきたい。

幕末風雲児と呼ばれた坂本龍馬から学ぶこと

2部　日本文化学科
2年　2812138　畠山　稜子

今回の自主研修を通して、幕末期の人々の生き様やどのようにして政治を動かしてきたのか、を学ぶことができた。

私は、坂本龍馬という人物をきっかけに幕末期に興味をもった。龍馬は、当時の人から見ても、また生きる時代の違う私から見ても、他の誰よりも先のことを見据えている男であったように感じる。しかしたくさんの史実を読むにつれ、龍馬が関係する歴史的出来事といわれているものも、「龍馬が本当に行なったことではないのではないか」、という疑問が書かれているものがあった。しかし、龍馬亡き後、どれが事実でどれが作られた歴史であるかということを確認することは、もはや不可能に近い。だからこそ、たくさんの史料や遺されたものを目にし、龍馬が行なったことなのかどうかを他人の意見を受け入れるだけではなく、個人的にも考えてみたかった。実際に、霊山歴史館では幕末期に起きた様々な歴史的出来事において、数多くの史実の通り龍馬が関係しているとあった。あの薩長同盟では、やはり龍馬は重要人物であるという説明もあった。また、霊山歴史館では、龍馬だけではなく、幕末期を生きた新撰組をはじめとしたたくさんの人々の遺品もたくさん展示されていた。新撰組局長である近藤勇も処せられた斬首。近藤勇は、斬首の後晒し首にされているが、それを彷彿させるかのように晒し首の巻き絵も展示されていた。その巻き絵を見たときは、「このような残酷なものが本当に晒されていた時代」を実感させられた。また、なかには血がべったりとついた衣類もそのまま遺されており、日記も複製ではないものも遺されていた。複製というものは見る機会があるが、本物は滅多にない。これら晒し首の巻き絵と血のついた衣類は、とても印象強く残っている。また、血のついた衣類を見たとき、幕末期に政治を動かす行為というものは今とは大きく違い、命がけの行為であったと重く受け止めることができた。殺される可能性があっても、命をかけて、政治を変えようとした倒幕派・幕府側の熱き想いを、是非とも今の政治家の皆様にも持っていただきたいとも強く思った。

京都霊山護国神社

また私は、龍馬が行なったと言われている出来事を知って龍馬に興味をもったのではなく、彼の遺した言葉や歌にも感銘をうけたこともひとつの理由である。たくさんの言葉や手紙を遺した龍馬であるが、龍馬が遺した言葉は、どれも何かに縛られることなく、たくさんの可能性を感じること

のできる言葉が多く、とても好きなのだ。今の世にも残り、たくさんの人の心に響くほどの言葉を遺した人だからこそ、たくさんの偉業を成し遂げることが出来たのだろうとも思う。しかし龍馬は何かが特別なわけではない。人よりも諦めない気持ちが強かっただけではないか、と私は感じている。薩長同盟など、龍馬でなくともそれを諦めない人がいれば可能だったのではないのか？とも思う。しかし、諦めない人が幕末期も現代もなかなかいないこともひとつの事実である。龍馬が成し遂げた偉業だけではなく、龍馬のように諦めず、その目的を達成させるためにたくさんの方法を考えることの必要性を、今回の自主研修において坂本龍馬という人物を通して学ぶことができた。

坂本龍馬・中岡慎太郎遭難の地（近江屋

坂本龍馬・中岡慎太郎の墓

亀岡市内の方言における研修の結果と持論

2 部　日本文化学科
2 年　2812139　半澤　圭介

【団体研修について】

団体研修を通して寺院などを訪れ、私にとってこの機会は初めての京都ということもあってか、今まで生涯学習の中で触れてきた文化遺産の実態を見ることができ、とても有意義なものとなった。写真を挙げながら説明していくことにする。

団体研修の中で訪れた四条京町屋は、私にとっては京都の風情ある一面を見て取れたと感じる。小泉さん方の説明を通して平安時代から育まれてきた京町屋の一端に触れることが出来た。

四条京町屋の屋内

国宝として認定されているものを間近で見る機会が無かったために、清水寺の参拝は私にとって文

化景観の保持の重要性やそのための改修工事の必要性を知るなど良い刺激となった。特にこの本堂から観ることが出来る景観は後世へ受け継がれるべきものであると、文献資料を踏まえた上で改めて感じた。そして同様に思うのは、国宝として認定され海外から観光客が増加し経済が潤うのは結構なことだが、観光客に対して寺院でのタブーの説明不足やゴミの放棄問題などの課題が僅かながらの参拝中にも確認したことを踏まえ、こうした問題への配慮と対策も国宝としての尊厳と価値を保持することに繋がると感じた。

清水寺　本堂にて

清水寺　本堂前にて

【自主研修について】

研修前の事前調査で京都府内の亀岡市における方言についての考察をしていた。それを紹介し、その上で研修の結果と自論を展開する次第である。まずその考察について記述していく。そもそも亀岡の方言または京阪弁は近畿中央部の方言に含まれるのであるが、その近畿中央部での方言は長い間国内の標準語であったために標準語として東京弁が確立したことにも強い影響を持っていたと考えられている。これを前提とする。次に亀岡の方言についてである。特徴としてザ行とダ行の混同『ザダ行』が挙げられる。

標準語・京都弁　【ザ行】ザジズゼゾ　【ダ行】ダ〇〇デド

亀岡市の方言(近辺)　【ザダ行】ダジズデド

標準語でのザ行とダ行の『イ段・ウ段』には表記や発音の区別が無く、ア・エ・オ段は区別があるが、ザダ行の場合ア～オ段まで区別が無い。つまり二つの行が一つに統一されているのである。またこの混同は亀岡市近辺にも見られる特徴でもある。なおこの混同によって生じる言語的弊害としては発話や表記の際、正確な区別が出来ないことである。具体的な弊害は何かを知る為、自主研修中に亀岡市役所にてお話を伺った所、市役所に訪れる高齢者の住民の方は『おはようございます』を『おはようごだいます』と発音することがあるらしい。ここに混同したことで標準語の発音に適応できていないことが伺える。これを言語面的弊害と言えるだろう。一方近年の傾向として若者は標準語の影響を受けてか、混同することは少なくなってきているとのことである。そしてその標準語の影響を直に受けているのは小中学生である。文献資料にて『学区の地域性』『居住歴』が影響に関係して

いるとのことであり、調査の結果、都市化・近代化が進行している新興住宅地では標準語化の傾向が見られる。これは基盤知識を吸収する時期である小中学生が教材などで読み聴く多くの言葉が標準語であることが要因と言える。また方言離れに関連して大阪弁の影響が強い。近畿地方各地で放映されている番組の多くは関西テレビ系列のものであり、よって大阪弁のアクセント・イントネーションを聴く機会が若い世代は多いために、亀岡の方言が希薄化する傾向があるとも言えるのである。以上、これらを踏まえて考察していく。

【例】「大阪弁の影響」　カタナの発音　若年者　カ**タ**↑ナ　　高齢者　**カ**↑タナ

まず以前標準語であった近畿中央部の方言は、現在東京弁を土台として誕生した標準語に大きな影響力を持っていたこと、現在の標準語（東京弁）の影響もあって亀岡市内の若年者はザダ行の混同が減少している傾向があることを踏まえ、私が考察するのはこれらはどの土地が首都圏化や都市中間層の増加また集中を果たすかによって、それに応じてどの方言を重視するかも推移していくという具体例ではないかと言える。時代の変遷に乗じて方言の価値と重点も変化していくことを物語っているのではないかと感じた。そしてこのような言語の変遷は為るべくして起こり、止められるものではないため、その行く末を見守っていくこととする。

京都府亀岡市におけるセーフコミュニティー活動について
～セーフコミュニティーの概要・篠町川西地区の取り組み～

2部　日本文化学科
2年　2812150　森　康平

Ⅰはじめに

私は、日本文化演習の自主研修の2日間を利用して京都府亀岡市におけるセーフコミュニティー（以下SCと省略）について調べた。1日目（2月27日）では、亀岡市役所でSCの概要について学んだ。2日目（2月28日）では、亀岡市内の篠町川西地区の区長である山田氏から川西地区で発生した水害について話を聞かせて頂いた後に実際に川西地区の被害現場を歩いてきた。

Ⅱ亀岡市全体のセーフコミュニティーの概要

SCとは「世界保健機関（WHO）SC協同センターが推進する『ケガや事故などは偶然の結果ではなく、予防することができる』という理念に基づいて、予防に重点を置き、地域社会全体で進める安全安心なまちづくりの取り組みを行う」ことである。京都府亀岡市は国内で最初にSCの認証を取得した。

亀岡市がSCの認証を目指した理由は、「人と人とのつながり、地域の絆の希薄化が進ん

できたこと」・「さまざまな不安が地域社会に浸透したこと」・「不慮の事故や自殺による死者数は死亡原因の上位であること」・「医療費・介護費の増加や財政負担の増加」が挙げられる。SC を導入して、以上の 4 つを「人と人とのつながり、地域コミュニティの再生」・「予防活動の推進による外傷削減」・「市民協働による総合的な安全・安心のまちづくり」・「医療費・介護費削減効果」に変換させようとした。

図 1　JR 亀岡駅前にある水害標識

亀岡市の SC では、「SC モデル地区」（各地域「自治会」の課題に沿ったプログラムの実施）・「SC 対策委員会」（亀岡市全域の課題に対応した SC プログラムの実施）に分類されている。前者では、「都市型モデル」と「農村型モデル」に区別している。また、「都市型モデル」には篠町自治会が役割を担っている。さらに、「農村型モデル」においては、馬路町自治会・旭町自治会・千歳自治会などといった 5 つの地区が役割を担っている。

一方で後者では、「自殺対策」・「高齢者の安全」・「交通安全」・「防犯対策」・「余暇・スポーツの安全」などといったことを亀岡市内全域で力を入れて取り組んでいる。

また、亀岡市の SC の特徴は、京都にある大学と連携協働していることである。例えば立命館大学においては、「モデル地区ワークショップ」・「地域安全魅力マップ作成活動」が実施されている。さらに、京都大学においては、「災害に強いまちづくりに関する調査や分析」が実施されている。

Ⅲ亀岡市篠町川西地区におけるセーフコミュニティーの取り組み

私は、亀岡市篠町川西地区で水害・防災に関することについて話を聞いてきた。

篠町では毎年、消防署のご協力の上で防災訓練を実施している。また、ただ防災訓練を実施するだけではなく、子ども達が参加しやすいように「どんと焼き」などを実施するといった工夫をしていることがわかった。

図 2　2013 年台風 18 号の水害の記録

川西地区では、過去 5 年間の上記の防災訓練の参加率（約 60 家中 40 家近くが参加）が高い割合を占めていることがわかる。

私が、川西地区の被害現場を見てきた上で、道路を盛土にするなどといった対策を行っている場所が多かった。さらに道には、道路だけではなく、家の玄関先も盛土にしている所も多数見られた。

図 3　道路を盛土にしている例

Ⅳ最後に

亀岡市のセーフコミュニティーについての研究は、「災害に対する安全安心マップ作成のワークショップへの参加行動の背景を検討」（村中ら 2010）・「Web マップ活用した防災・安全情報への関心や情報にどのような相違があるかの検討」（瀬戸ら 2012）などがある。これらの論文は防災意識に関する研究である。逆にセーフコミュニティーの論文では社会的弱者に関する論文が少ない為、今後は、社会的弱者を中心として、高齢者福祉と災害・防災を結びつけて検討していきたいと考えている。

学んだことと得たもの

1 部　日本文化学科
2 年　2812153　山名　楓

長い学生生活最後の団体旅行と言えるであろう、今回の京都研修。月日の流れは、あっという間なものだ。ガイダンスや事前の下調べをしながら、まだかまだかと待ち遠しい日々を過ごしていたと思いきや、5 泊 6 日に亘る長旅も、それも気が付くと全て思い出に変わっていた。終わってしまった寂しさがある中で、いま、私は、レポートという名の現実と向き合っている。憂鬱な気分でパソコンに向かっているのが正直なところだが、しかしながら、目を瞑り振り返ると、今でも研修での出来事がよみがえってきて、まるで雲の上にダイブしたような、ふわふわした気分になる。

私の中で一番印象に残り、感銘を受けたものは、自主研修で訪れた幕末ミュージアム。一番楽しみにしていたものでもある。幕末や新撰組が大好きな私にとって、終始ワクワクしっぱなしで、目をキラキラさせていた。幕末が大好きな私が楽しめるのは勿論、付き合わせてしまったというのが正しいであろう、あまり幕末に詳しくない友人も、本物の刀や銃弾、日記や血の付いた屏風、全てについている解りやすい解説にとてもいきいきしていた。メンバー全員が十分に楽しめ、学び、吸収出来る内容のものだったはず。

幕末ミュージアム。館内は撮影不可だったので外観のみの撮影。

そして、これまた非常に感銘したのが、京の街並を徘徊や散策をすることが出来たことだ。今まで京都に来たことは高校の修学旅行含む四回だが、今回の研修のような長旅は初めてだった。時間もたっぷりあったのでじっくりと京の街を歩きみることが出来た。ほぼ毎日歩き回っていたので、札幌の道と少し似ている京都は歩きやすく、道も覚えやすかった

ので、三日目になる頃にはだいたいホテル周辺近辺は把握していたと思う。飲食店の横に何気なく墓や建物の跡があるあたりは、切なさも感じたが、やはり流石の一言だと感動。夜、とある小説の舞台にもなったという、飲み屋街の一本道を歩いたのだが、夜露と夜風、そして少しの湿気があって、行灯はもう消えてしまっていて少し残念だったが、そんなことを気にさせないくらい素敵な道だった。これが京都だ！と言わんばかりの、趣と風情のある、素敵な空間だった。

散策。

最後に、沢山の時間を共有した友人達。この旅行によって皆との仲も、以前よりも、もっともっと深いものになったと思う。研修で得たもので、私の中では一番大きいものだった。この仲間達と京都に行くことができて良かった。集合時間に遅刻する友達や、別行動をしたことにより迷子になる友達がいたりと、途中様々なハプニングがたくさんあったが、それもまた良い思い出ということにして、笑い話にしよう。

北野天満宮にて。

京都への観光者からみた不満や利点

2 部　日本文化学科
4 年　2810104　石塚　耕平

今回、私がこの日本文化演習に参加し研究考察していきたかったテーマは、世界遺産や国宝などの国の重要な寺社を回り、それを比較、研究するといったものであった。しかし、実際に京都に着き、団体研修、自由研修で寺社を回るに連れて事前に立てておいたテーマを取りやめ別の新しいテーマを設定しようと思うようになった。それが「京都への観光者からみた不満や利点」というテーマである。私が実際に感じた不満は大きく二つある。

一つは、現在の寺社の景観についてである。よく寺社の紹介パンフレットなどで、「～寺は当時の風景を映し出してくれる…」といった文言で観光者にその寺社の魅力等をアピールしている。しかし実際に私が行った先の寺社の全ては、火事で焼失したためその後修復したり、もともとあった建設地から寺社を移したりと、つまり寺社が作られ

た当時の面影はない、もしくは極めて現代風になっているのではないだろうか。例えば、最澄により開かれた天台宗の総本山である比叡山延暦寺は、最盛期には三千にも及ぶ寺院が建立されていたとあるが、比叡山の歴史上最大の事件である、織田信長による比叡山の全山焼き討ちが行われた。実際に団体研修の二日目で見た延暦寺もその後の人々が復権し修復を重ね続けたもので、私は、その話を聞いたときにとても当時の風景を思い浮かべることはできなかった。また延暦寺だけではないが、その不満に加えて理由をつけると、寺社の多くに現代の建築物や電線、外国人観光者に向けた英字での看板、寺社から見える風景に自動車や道路が見えるなど、これらの要因により寺社の日本風の景観を損ねてしまっているという点である。

二つ目は、有名な寺社は観光客が多すぎるという点である。人気の観光地である京都の性質上、国内問わず海外からも観光客が訪れるようになるのは必然であるが、今回の文化演習は人気の季節である春の桜のシーズン、秋の紅葉のシーズンを外して行ったにも関わらずメジャースポットの清水寺や伏見稲荷大社などには大勢の観光客がいた。地元の人に言わせればまだ少ない方だという。やはり人が多すぎると寺社の観光はあまり楽しめないと感じた。実際に自由研修で行った、文化遺産の石庭で有名な竜安寺では、そのあまりの知名度から多くの観光客が訪れていた。静かに石庭を眺めるのが本当の楽しみ方なのだと思うが、やはり人が多いせいもあり雑音が多く、集中して石庭を見るのは困難であった。

そこで私がこれらの不満をあまり感じずに楽しめた場所は、栂尾山の高山寺にある国宝石水院である。高山寺は紅葉シーズンは観光客が大勢やってくるが、時期も外れていて、京都駅からもかなり遠方なため、私が訪れた日は他の観光客は 2～3 名ほどであった。これだけ人が少ないとストレスもなく、小さな川の音も聞こえてとても日本らしく、風情のある場所に感じられた。

京都に限らず、観光地はその地の風情をより大切にするべきだと主に感じる研修旅行であった。他の地に「観光」するというのは、その土地の良いところや、悪いところを見つけそれを自分の住む地で活かし、改善するということで、それを今回の演習で気づくことができ、とても有意義なものとなった。

日本文化演習を振り返って
～寺社仏閣巡りの意義についての考察～

2 部　日本文化学科
4 年　2810110　大宮　法明

私は、以前にも一度、高校の修学旅行の際に京都に訪れた。その時は、仏像や寺社仏閣に「京都らしさ」を感じ、これらを中心に見て回った。そのときに私が感じたことは、寺社仏閣に関心をもち、さまざまな地域や国、京都から遠く離れた地から訪れる観光客が非常に多い、ということである。このことから、仏像や寺社仏閣は、とくに仏教を信仰していない人でさえひきつける魅力を有していることがうかがえる。では、なぜ多くの人が寺社仏閣にひきつけられるのかといった関心のもと、私は今回の日本文化演習に参加した。そのテーマについて掘り下げるため、自主研修では蓮華王院（三十三間堂）や西本願寺、東寺、伏見稲荷大社や高山寺、竜安寺といった有名な寺社仏閣を中心に見て回った。

蓮華王院前の写真。本堂は撮影禁止のため、入口付近にて撮影。

まず、蓮華王院には、多くの仏像が保管され、良縁や幸運、安全など仏像のもつさまざまなご利益が仏像の近くのパネルにわかりやすく表記されており、多くの観光客が関心をもった様子でみてまわっていた。つづいて西本願寺では、古くからそのままのお堂を実際に自らの足で歩くことができた。木目板の床をふみ、軋む音を聞くたびに歴史を追体験しているような感覚におそわれた。つづいて、東寺では、焼けてしまった仏像や五重塔が見られた。

西本願寺の写真。悪天候にもかかわらず観光客は多かった。

以上のように今回の自主研修では多くの寺社仏閣を回った。このことを振り返り、感じたことは、信仰や歴史は目に見えないもので、どこか堅苦しいイメージがあるが、仏像や寺社はこれらを目に見えるかたちであらわしたものだという点である。京都の仏像や寺社には、過去から現在まで姿を変えずに残っているものがあり、これらを見ることで安易に信仰や歴史を感じられる。その点に多くの人びとがひきつけられている

のではないかと感じた。

今回の日本文化演習で学んだことは以上である。今回の研修でさまざまな寺社を回ったが、事前にそれらについて調査し知識をたくわえておくことが不十分だと感じたため、以後、このような機会に恵まれれば、出来る限り事前学習も十分に行いたいと感じた。

参考文献：『京の仏像 NAVI らくたび文庫 NO.14』株式会社らくたび　2007 年 7 月

日本文化演習報告書　第３号

発行日　平成２６年３月２５日

発　行　北海学園大学　人文学部

印　刷　北海印刷株式会社